

○は じ か き

法之園の號を累ぬること百にこゑたるを以て茲に第一

號より第百號にいたる間に掲載せしところに就いて、も

つとも有益なるべしとおもふものを選び法園拔萃集と

して逐次出版することとなり、今赤松連城師の説教演説

集を以て、その第一編となす、而して法之園に掲載せしと

ころは、説教法話演説の三類あり、故に此編亦其三類に分

たんと欲したるに都合ありて演説説教の二類とし上下

二卷となすこととなり、もと法話欄中に掲げありしもの

は便宜によりて、右二類中に編入することとなりたり、又



法之園に掲載せしところ、九年の長月日にわたり、數十席の多きに及ぶも、とより一人の筆記になりしものにあらず、今選擇を加へたりといへども、猶粗漏なるものあるを免かれず、而して師の校閲を経たるにもあらざれば、杜選のふしあらば、もとより弊社の罪なり

明治三十年九月

法之園編者しるす

○説教の部目次

- 彌陀智願の廣海に等二首によりて 一丁
- 總會所説教 十三丁
- 眞俗二諦(前席) 二十七丁
- 煩惱具足と信知しての一首によりて 四十一丁
- 論主の一心と説けるをば等 四十九丁
- 安樂佛國に至るには等 七十七丁
- 無碍光如來の名號と等 九十一丁
- 二者信心一ならず等 百〇四丁
- 三信展轉相成す等 百十二丁
- 白骨の御文章によりて 百十六丁
- 信明院殿御正忌説教 百三十丁

- ◎命濁中天刹那にて等 百四十丁
- ◎善導大師證をこひ等 百四十七丁
- ◎自問自答の御文章によりて 百五十五丁
- ◎信心徹到する人は等 百六十五丁
- ◎眞實信心をさるをは等 百七十五丁
- ◎御和讃によりて 百八十五丁
- ◎善導大師證をこひ等 二百丁
- ◎御法會總會所説教 二百十三丁
- ◎總會所説教大要 二百二十丁
- ◎御文章によりて 二百二十五丁
- ◎佛教の道徳云何 二百三十三丁
- ◎蓮如上人御待請御消息説教 二百四十九丁

説教法話集之部

赤松連城師口演

◎彌陀智願の廣海に等二首によりて
 今夕は當寺に於て。信曉院殿顯如上人の。三百回御遠忌預修せらるゝに付き。招きに應じて一席の法話に及ふことである。元來善知識の御恩は廣大なるものにて。宿善開發して善知識にあわずは。往生は叶ふ可らずとある如く善知識の御教化にあはずは出離解脱することとは相叶はぬ。夫れゆへに信決定の上は。「このおんことばり聽聞申わけ候こと。御開山聖人御出世の御恩。次第相承の善知識のあさからざる御勸化の御恩と。有りかたく存候」そこで毎年の報恩講は。御開山聖人の御出世の御恩を喜ぶことであるが。しかるそれを

御傳へくたされし。普知識のましまさずば。今日の我々が。この尊
き御教を聴聞することはならぬ。されば番々出世の普知識をなれに
愚はなけれども。殊に第八世の蓮如宗主は御宗門御再興あらせられ
たる御師にましますまた今晚御法會を勤めらるゝ信曉院殿は。皆
聞き傳へらるゝ通り。容易ならざる法難の時に當り今日は御宗門が
破るゝか。明日は御宗旨が倒れるかと云ふ困難の中をこのきて。御
法門を御傳へ下されたればこそ。末世の我々がやすくと。この御
謂れを聴聞申すことが出来るのである。併しながら顯如上人の御苦
勞は。其實を考ふれば。外より起りた法難である故に。時の門徒は
みな粉骨碎身して。法難に趣いたことである。今日はさうであろう
か。法難はありはせぬかと云ふに。かのさきすとなさの外教が。次
第に弘まりて我が領分にまで侵さんとする。これが即ち法難である

いかゞして之を防いたならばよかろうと。人皆心にかけることであ
るが。これは大分様子も違いて。昔時は弓や鐵砲を以て攻て來たが
今日は然うではない。故によしや外教がこれほど出で参りても。自
ら有縁の教を信することに於て差支のない。信教の自由を憲法の上
に有して居るなれば我々が堅く自ら有縁の法門を信すれば。外教の
弘まるも。更に恐るゝ程の事は無い。夫れよりも今日恐る可き事が
ある。夫れは何ぞと云ふに。即ち今の賛題に備へ奉つりた。造惡こ
のむわが弟子の。邪見放逸さかりにて。末世にわが法破す可しと。
蓮華面經にとき玉ふとの。高祖大師の御歎きである。外から來たも
のは。如何様ともすることか出来る。内より破るものは。獅子身中
の虫にて防ぎやうがない。この佛法は外よりは破ることは出来ぬな
れども。内よりするものは實に致し方がないこれは佛法の上ばかり

ではない。世間にも有ること。孟子も。人必自侮而後人侮之。國必自毀而後人毀之とありて。たとひ人よりされはと謗られても。我身に省みて耻ることさへなければ。却て謗りたるものが悪くなる。國も他よりいかほと攻め來るとも。國內か一致利合すれば。決して破ることはない。人は自ら不調法があれば侮られる。國は内に一致團結がなければ。必ず亡ぶに違ひない。今佛法も其通りで。末世に我法を破るものは。邪見放逸さかりなる。造惡このむわが弟子である。と仰せられた。顯如上人の時の法難や。今日の外教は。外から來りたるものであれば。さはと恐るゝに足らねども。内に顧みて要心をせねば。如何なる大事を引き起すかも知ぬ。されば我々がその造惡をつゝむは。如何にせば宜しきやと云ふに。そこはこの二諦の御教を信せねばならぬと云ふ所である。元來佛法の基本は何

ぞ有かと云ふに。因果の道理であると云ふことは誰も知りて居ることであるか。その因果に出世の因果。世間の因果の二ツがあり。その二の因果を撥無するが邪見である。故に因果の理を信すれば。邪見にもならねば。放逸も出來ぬけれども撥無因果になる故に。放逸になり。邪見に陥る。そこでこの因果の道理を信ト。この邪見を抑ゆるが。佛法の通則である。然るによら因果の道理は信せられたにもせよ。無始曠劫より已來煩惱惡業にほたされたる身なればとて自力にては。これをたごむことはならぬ。故に眞宗では。他力回向と云ふことを基本として教へることである。前の和讃に「彌陀智願の廣海に。凡夫善惡の心水も。歸入らぬればすなわちに大悲心とぞ轉ずなる」とある。これが淨土眞宗の。轉惡成善の相をお示しなされた御教化である。我々かも我か心にまかせたならば。大

悲心と云ふことはない。清淨の心もなく。眞實の心もなく「正法の
 時機と思へども。底下の凡夫となれる身は。清淨眞實の心なく。大
 菩提心いかゞせん」と底下の凡夫であるからは。清淨の心もなけれ
 は。眞實の心もなく。大菩提心を起すことは決して叶はぬ。かゝる
 淺間敷ものなれども他方回向の信をいたゞき。御本願の海に流れ入
 れば。歸入しぬれば即ち。大悲心とぞ轉ずなる。其歸入すると云
 ふは。唯本願に乗托するはかりにて。一念歸命の立處に。凡夫のわ
 ろきこゝろをは。佛心とおなトものにめしなれ玉ふゆゑに大悲心と
 ぞ轉ずなると仰せられたものである。川々の水か海に入れば。同一
 に鹹味となるがごとくである此喻へは所々にお用ひなされてありて
 「名號不思議の海水は。逆謗の屍骸も止まらず。衆惡の萬川歸しぬ
 れは。功德のうらほに一味なり」或は「盡十方無碍光の。大悲大願

の海水に。煩惱の衆流歸しぬれば。智慧のうらほに一味なり」又は
 「本願力に遇ひぬれば。むなく過ぐる人ぞなり。功德の寶海みち
 くて。煩惱の濁水へたてなれ」など所々に御説きあらせられてあ
 る。もと我々凡夫の心は。善と云ひ惡といひ。みなことごとく妄情
 である。其の凡夫の心が彌陀智願の廣海に入れば。行者のわろさこ
 ころを。如來のよき御心とおなト者になれ玉ふ。こゝを佛心と凡心
 と一体になるといひ。または轉惡成善ともの玉ふことである。かく
 のことごとく大悲心を頂ひて見れば。邪見の生ずるはずもなく。放逸の
 出來るわけもなし。この本願を信せられた身は。即ち常行大悲の
 身なりと云ふ譯合である。夫れで初めの和讃は。表てから仰せられ
 て。御信心を頂くことを示された。すなはち正詮である其の頂ひた
 御信心が自然と多念に顯れるから。夫れを表から云へは常行大悲と

云ふ。所謂口にもいたし色にも其相たは見ゆるなりで。常に佛の行を行ずることほりにて。稱禮念すれども自の行にはあらず。たゞこれ阿彌陀佛の行を行ずるなり。かくのまどくうるわしく大悲の行を行する信徒が。この法義を相續すれば。外に如何なる法難か生ずるも。恐るゝことは決してなひが。もろくからずして他に法難なきも。内が互に相争ひて和合せざれば。佛心とまるで反對であるゆゑに。或は貪欲の水に弱れ。或は嗔恚の火に焼かる。自分の心を貪瞋の水の中に入れて仕舞わば。いさゝかも佛の慈悲の顯はるゝことはないうゑに。此法門はひとりぞに破れ亡ぶぞと。次の御和讃には。裏から詮されたものである。さてその大悲を信するについて。御本願の生起本末を御示しなされたのが。前の二首の和讃である。彌陀智願の本を穿鑿すれば生起とは。如來の作願を尋ねれば。苦惱の有情

を捨てずしてとあるこれが。本願の生起である。作願のもとは。苦惱の有情を捨てずして。苦惱の有情とは觀經に爲煩惱賊之所害者と説き玉ふ。其の苦惱を救はんがために。除苦惱法となり玉ふが佛である。これが如來の作願の生起である。本末とは。其苦惱の有情を救ふについては。其方法を設け玉はねばならぬゆへ。其れについての色々の工夫が五劫の御思案にて。つまり我々にはとても自力は叶わねば。法藏菩薩の御手許にて。願行を御成就あらせられ。それを與へて助けてやると決心し玉ふが。回向を首として大悲心を成就せりにて。回向を以つて。我々を救ふの手段となされたことである。中興上人は。回向とは如來の御助けを云ふなりと仰せられて。我々を御助け下さるゝ方法が回向である。回向と云ふはふりむけると云ふことにて。回はめぐらす。向はむかう。全體われゝの方にて。

佛ぶつに回まし衆生しゆじやうに回ますべきことなるを。佛ぶつがかわりて願行ぐわんぎやうを成就じやうじゆして佛ぶつの方ほうより衆生しゆじやうに回向まごうし玉たまふが他力たうりき眞宗しんしゆの御謂おんいはれである。其處そこを中祖ちゆうそ大師だいしは。行者ぎやうじやの方ほうより爲なさぬ回向まごうなるがゆゑに。如來にょらいの回向まごうを。行者ぎやうじやの方ほうよりは不回向ふまごうとは申まうすなり。佛ぶつの方ほうより發願回向はつぐわんまごうし玉たまふを。我々われの方ほうにてはたゞこれを領受りやうじゆするばかりで。往生おうじやうほどの大事だいじを成就じやうじゆせしめていたゞくことである。其如來そのにょらいの大悲だいひを受うける場合は。眞實信心しんじつしんの稱名しやうみやうは。彌陀回向みだまごうの法ほうなれば。五劫ごこつの間の御思案おんしあんと。永劫えうこつの修行しゆぎやうを。只ただ一句いっくの南無阿彌陀佛なんぶあみだぶつの六字りくじにおさめて。我々われに授け玉たまふ故ゆゑに。其南無阿彌陀佛そのなんぶあみだぶつを彌陀回向みだまごうの法ほうと云ふ。夫れを我々われが受取うけとる様さまを。眞實信心しんじつしんの稱名しやうみやうと仰おほせられた。まづ眞實信心しんじつしんと云ふは。南無阿彌陀佛なんぶあみだぶつの六字りくじを聞開きひらきたるすがたにて。信心しんと云ふもこの六字りくじの外ほかにはなし。信心しんと云ふも安心あんと云ふも六字りくじの外ほかにはあるべから

す。其他力そのたうりきの信心しんが自然じぜんと多念たねんに及およぶが稱名しやうみやう故ゆゑに。眞實信心しんじつしんの稱名しやうみやうと仰おほせられたり。心に頂いたきたるが信心しん。口くちに出でたるが稱名しやうみやう心の信心しん口くちに顯あらはれて稱名しやうみやうと云ふのであるから。信行しんぎやうともに南無阿彌陀佛なんぶあみだぶつの外ほかはない。そこを和讃わさんに「不回向ふまごうとなづけてぞ。自力じりきの稱念しやうねんさらはるゝ」と仰おほせられて。一聲いっせいの稱名しやうみやうも回向まごうするのでなく。信しんする心こころも。念ねんする心こころもみな彌陀如來みだにょらいの御方便おんほうべんより起おこさるゝものなり稱名しやうみやうは我が稱なづへるなれども。其心そのこころを如來にょらいにふりむけるのでない。稱名しやうみやうは勿論もちろん信心しんも。我われがこくして信しんするに非あらず。皆如來回向みなにょらいまごうの信しんなり行ぎやうなり。若行わくぎやう若信わくしん無なし一事いじ非阿彌陀如來ひあみだにょらい清淨願心じやうじやうぐわんしん之所回向しよまごう成就じやうじゆ。そこを不回向ふまごうとなづけてぞ。自力じりきの稱念しやうねんさらはるゝ。これが如來にょらいの作願さくぐわんの生しやう起き本末ほんまつである。其佛そのぶつの御企おんくふたてにいたがひ奉たてまつるばかりにて。そのがはからひなくして。此智願このちぐわんの廣海ひろうみに流ながれ込こめは。歸入きにんをぬればすな

わちに。大悲心とを轉すなると。うるわしく信心をいたゞき。其上には禮拜をもし。憶念をもし。邪見もなく。放逸もなく。おのづから。常行大悲のことはりにかなひ心多歡喜の利益を得て。互に一致和合すれば。大丈夫に此法門を守り。法威を百歳の後までも。傳ふるが今日この御法筵につらなりたるしである。今日此の御法筵につらなるも。前代出世の善知識の御苦勞門徒の粉骨碎身の方なれば。又我々も身を粉にし骨を碎きても。堅固に此法をまもり。昔の人の力により。法を聞くことを得たることを知りたるともに。未來の人の爲に此教をつたへるは。我々が宗門に對するの義務と心得ねばならぬことである。ゆゑにうるわしく此法義を相續して。自分くの手元を省み。不調法のなきよふに。差手引手に氣をつけてうるわしく法義相續するが。眞宗二諦の教を守る。念佛行者の身の

振舞である。

○總會所説教

此間より日々引續きお話に及ぶことであるが。只今拜聽されし御直論にも御示しなる如く。此度本山に於て蒐覽會なる者を開き。高祖中祖の御舊跡に傳へ有る所の御遺物。其の外種々の寶物を集めて。一々諸國を巡拜するに及ばす。この本山に於て一時に拜觀することを得せしめしは。決して他の理由ありての事ではない。唯之を以て報謝を營むの助縁と成る様にとの事である。彼の觀音様を信する者が三十三所の靈場を巡拜するとか。其外種々と巡拜する處もあることなるが其人々が如何なる心を以て巡拜するかは。皆人々によりて。異りてある事であるが。今宗において二十四輩を巡拜するのは。皆高祖大師中祖大師其外御歴代善知識の御苦勞の程を知りて。以て我

が報謝の營とすることである。彼の三十三所等を巡るものは。或は現世の幸福を得ん爲にとてする者もあり。又甚しきは自分勝手なる無理の頼をする者もある進んで後世の爲にすると云ふ者でも。祈願求請でありて己の行を積みて來世の爲にするのである。今宗は其れとは大きに變りて居りて二十四輩を巡るも決して後生の爲にせんとする者ではない往生の事に就て我等凡夫の力を運ぶことはすこともない。しかるに二十四輩を巡拜するは何の爲であるかと云ふに我が往生は已に信の一念に於て定りたる後「この御ことはり聽聞申わけ候事。御開山聖人御出世の御恩次第相承の善知識の淺からざる御勸化の御恩と存トよろこび申候」高祖中祖の御苦勞あらせられたる御舊跡に參拜し。御遺物を拜觀するに就ても。當時の御心勞の程を思ひ。其御恩の程を知りて。御禮報謝を致すことであるを今本山

の蒐覽會を拜觀しても其通にて。高祖大師以下番々出世の善知識が。教法弘通の爲に御心勞きたされし事を思ひ。其御恩を知り。御恩の程を喜ばせていたゞくが所詮である然るにこの蒐覽會を以て。世の博覽會等と同一に見做して。何心も無く過ぎ去る様では。甚た以てつまらぬことである。さて御報謝をするに云ふに付て其御恩が知られねば決して出来るものでない。而して其御恩を知ると云ふことが甚た六ヶ敷ことである。世間の事にても。恩を恩と知ることが中々六ヶ敷い。第一親の恩と云ふことにても。小兒の時分には親でなければならぬと思ひ。暫時傍を離れても。直に泣き出す位でありし者が。段々成人して漸く獨立の出来る様になると。早親の恩と云ふ事も忘れて仕舞ふて。甚たしきは。親が邪魔になる様に思ふものが出る。聖上の御恩にても。其御恩を御恩と思はず。常にうかくと

暮すのみならず。甚たしきにいたりては。畏くも帝室を蔑視して。皇國の罪人と云ふ様な者が出来る様になる。只今の御直諭の中にも「この頃は海陸軍の大演習につき。聖上親く臨御まじく御統鑑あらせらるゝは。全く億兆保安の叡慮にまじませば。いよく皇上を奉戴し。朝旨を遵守し。優渥の聖者に酬ひ奉るべく候」とある通り。聖上陛下には。朝な夕なはこの民の事を御苦慮あそばされて。治に居りて亂を忘れてはならぬ。海陸軍の備はありても。まさかの時に用を爲さぬ様なことではならぬ。萬一戦争の起りた時には斯くして戦ふ。斯くして防くと云ふことの稽古をさせて御覽になりし事にて何卒してこの日本國內の民臣を安寧無事ならしめんと御思召である。斯く我々臣民の爲に。御心を御なやめくたさる事を思ひ奉れば。我々臣民たる者は。争でか。聖恩を思ひ奉らぬことが出

來様か。謹て朝旨を遵守し。優渥の聖旨に酬ひ奉る様にせねばならぬ。然るに一番近き關係の有る親の恩でさへ忘れて仕舞ふて。恩を恩と思はぬ位である故に。天子様の御恩の程を知り得ることが出来ぬ。況して一段別なる所の。佛の御恩と云ふことは何とも思はずして暮し過ぎる者が多い。然れども佛の方に於ては。我々衆生の爲に。片時もすてすして御心を御碎きあらせらるゝ。而して佛の方には。色心の二光を以て一切衆生を御照しありて（編者曰く法之園第十號島地師の演説を參見すべし）。此光明は。誰を照して誰を照さぬと云ふ隔は無き故に我こそは其恩を受けぬと云ふ者は一人もない。而して我々凡夫は知らぬから何とも思はぬ。親の恩はあれども親の恩を知らぬものは何とも思はぬ。天子様の御恩はあれども。天子様の御恩を知らぬ者は何とも思はぬ。佛の御恩はあれども。佛

の恩を知らぬ者は何とも思はぬこの佛の恩を知らぬ人が。其前佛とも法とも知らぬ時分より。追々に進み來りて。寺に參詣する様になり。佛を拜禮する様になり。説教を聽聞しても分る様になりて來たのは。是皆佛の御恩である佛の光明の力によりて追々に進んだ者である斯く佛の光明の力によりて進み來りて。モ一段と云ふ處になりたる人が。若も空く三途に立歸る様なことがありては。何とも申さ様の無き残念なることである。諸佛中に於て彌陀の勝れ玉ふことも知り彌陀の本願は能く我等凡夫を助け玉ふ法なることをも知り。既に十の九までは出來上りたる人にて。往生は一念の信にて定まると云ふことを明らめ得ざる人でありたならば。未だ佛の御恩を知り得たる人でない。南無阿彌陀佛の六字が我物になりたる時。始めて佛の大恩が知らるゝのである。この御恩を知る身にならねば何の

益にも立たぬ。御恩報謝々々々々云ふことは。人皆口にする處であるなれども。御恩報謝が出来る身の上になるのは中々以て難ひことであるこの御恩報謝の出来る。佛の御恩を知る身に得ならぬ故にいつも人並の風情にて。人が佛に拜禮をするから我も拜禮を爲し。人が寺に參詣をするから我も寺に參詣をする云ふ位な事になる。これでは實に残念な事である。而してこの佛の恩を知ると云ふ事は決定信の上より得る所の利益でありて。彼の現生十益の中に。知恩報徳の益と示されてある。彼の佛とも法とも知らぬ。未だ機のと、なはぬのか無宿善でありて。未だ機かど、のはぬ故に佛の御恩から遠ざかりて居る。この佛恩から遠ざかりて居る。未だ機のと、なはぬ者にて。皆佛の光明の力によりて。追々に御催しにあづかりて居るのでありて。段々と機のと、なふ様になりつゝあるのである。

併し機がとれない。宿善の催しにあづかりても。能く開發と云ふの
 場合にならねばならぬ。彼の花の蕾にても。冬の日の蕾も何も無き
 處より。追々催ふされて蕾の極少さなるものが出來。それより追々
 と進み來りて將に咲き出でんとするの大きやかなる蕾となる。しか
 し此時は未だ花か咲たとは云はれぬ其蕾が日光に催ふされ。雨露に
 促がされて。今日いよく美しく咲き出でたと云ふ處が。開發と云
 ふものでありてこれが宿善開發であるこれが信樂開發である。この
 宿善開發と云ふのと信樂開發と云ふのは。決して別なる事ではない
 恰も蕾が開いたと云ふと。花が開いたと云ふとの様なものである。
 蒼が追々大きくなりて。始めて開いたと云ふ邊より云へば。蕾が開
 いたのである。その花は今日始めて咲き出でた花であると云ふ邊よ
 り云へば。花が開いたのである。宿善は蕾である。信心は花である

宿善の蕾が開いた時。信心の花が開けたのである。この花が開けた
 時其利益として知恩報徳と云ふ事があらわれるのである。そこで花
 の開けた時より其前をふりかへり見れば。日光に照らされ。雨露に
 潤はされたるの恩があり。偶々淨信を得ば遠く宿縁を慶こべとある
 如く。今信心を獲て。其今までの事を考へ見れば。高祖大師の六百
 年前に。竹杖草鞋の御苦勞も。皆今日の我々の爲ならぬはなく。其
 他累代の善知識の淺からぬ御苦勞も皆今日の我々の爲ならぬは無い
 と知られてこそ。始めて御恩が御恩と知られ。知恩報徳の思に住す
 る様になる。然るにこの信が無き故に。御恩の程も分らず。たゞ人
 並の風情となり。外面ばかりは佛法者後世者と見へても。内心には
 何の得る所もなく。可惜無上の妙法に遇ひながら。またも空しく三
 惡道に迷ひ込まねばならぬ様になる。さて此席には後生の有る事は

實か知らん。彌陀の本願は眞か知らんと云ふ様なる。あらくとき疑のある人は有るまい。追々宿善の御催しにあづかり。何んでも佛の本願にすぎりて往生せねばならぬと云ふ様になりては居ながら。また如實不如實と云ふが領解の出来ぬと云ふ。細かな疑の晴れぬに困ると云ふ様なる。人が多いであらう。如實と云ふのは。彌陀の本願のまゝを信じて。佛の御恩か知られる身の上となりたる人である。不如實の人は。未だ佛の御恩を知り。佛の御恩を報謝すると云ふ處には至らぬ。不如實の人は南無阿彌陀佛を稱へながら。また自力の心がすたらぬから。佛の御恩と云ふ事が知られぬ人である。御恩を知らざる故御報謝をすることが出来ぬ。「信心のひとにおとらとと疑心自力の行者も。如來大悲の恩を知り。稱名念佛はけむべし」と。如來大悲の恩を知りて稱名する様になれと御勸めあそばさるゝ

そこで不如實の人は。名號に手を掛けながら。己が心を清くして往生する様に心得。又己が行を勵みて往生する様に考へ居る。しかこの自力の心行にて往生することは出来ぬ「願力成就の報土には自力の心行いたらねば。大小聖人みなながら。如來の弘誓に乗ずなりと。御示あらせらるゝ。如實と云ふことは此の様なる事ではない。我等が往生の正因は。我がはからいにて得るのではない。佛の願力によりて得させていたゞく。佛の長載永劫の御苦勞か即ち南無阿彌陀佛でありて。淨土も願力によりて成りたるもの。我がいたゞくべき信心も願力によりて成りたるもの。この信心を願力の御はたらきによりて我々に得させていたゞく。これが如實の御信心である。それ故信心堅固にして動くことは無い。御文章にも「願力の不思議として佛の方より往生は治定せしめ玉ふ」と仰せらるゝ。不如實の方

にては「不如實修行といへること。鸞師釋してのたまはく。一者信心あつからず。若存若亡するゆへに」「二者信心一ならず。決定なきゆへなれば。三者信心相續せず餘念間故とのべたまふ」とありて。信心あつからず信心一ならず。信心相續せずとありて。其不動の信心でなきことは明に知られるであらう。我が方の手造の信心であるから。淳からず。一ならず。相續せずである。しかるに如實の信は我が方の手造の信心でなき故に堅きものである。全く佛心であるから。手強ひのである。佛の方より定められたのである故に。此信相續して往生するのである。「光明てらしてたへされば。不斷光佛となづけたり。聞光力のゆへなれば。心不斷にて往生す」この光明が斷へずして照らしてきたさるゆへに。信心も亦不斷にして往生するのである。「彌陀智願の廻向の。信樂まことけるひとは。攝取

不捨の利益ゆゑ。等正覺にいたるなり。如來様が攝取不捨なるゆへに等正覺にいたる。等正覺に至るゆへに。憶念の信がたへぬと云ふ様になるのである。して見れば。我々の佛とも法とも知らぬ中より佛の色心二光を以て照らされて。それより追々と進んで信樂開發するに至る時。全く光明の中に攝取せられて。其中を出様と思ふても出られぬ様になる。これまで離れて居たものが光明中に攝取せらるゝ身となれば「無碍光如來の名號と。かの光明智相とは無明長夜の闇を破し。衆生の志願をみてたまふ」自分がさばりて往生するのではない。佛の方より迷の路を御閉ぢくたされて。たごひ地獄へ落んと思ふとも。我がはからいにては地獄へも落ちずして極樂へまいるべきものなりと云ふ様になる。その上には善導大師の仰せらるゝ如く。行住坐臥。不問時節久近。念々不捨者。是各正定之業と云ふ様

になる。念々に捨てずとは。我が方にて無理に念々相續せねばならぬと勤むるのではない。佛の願力によりて信を獲。佛の願力が御放しなき故に。自然に此方が念々不捨になると御示しあらせらるゝ。何分如來の御恩を知る身にならねばならぬ。其御恩が知られた上には。何をするのも報謝でなき事はなけれども。第一に御すゝめになる所は稱名であれば。この報謝行を怠らぬ様にせねばならぬ。その稱名相續するに就ては。佛に御禮する事も出來。佛を讚嘆する事も出來る佛敎の爲に。國家の爲にすると云ふ事も隨がひ起りて。實に名號中に萬善萬行がこもりてある。斯く殊勝によろこばるゝ身の上となれば。自然に佛祖の冥覽をおそれて。身の行も慎む様になる故に。何卒この御恩報謝の出來る身の上とならねばならぬ。この身の上となりて已前の事をふりかへり見れば。皆是祖師の恩なり。

皇國の恩なりと云ふことが知れる故に。護國扶宗の心を起こして御直論中にもかへすゝも。護國扶宗のため盡力之れあらば。こたび參集の所詮此の上はあるまどく候と仰せらるゝ如く。此の度遙々の參集を無駄にして。空しく歸へりをせぬ様にせねばならぬ事である

○眞俗二諦 (前席)

王法佛法は一雙の法なり鳥のふたつの翼の如く車のふたつの輪の如く一もかけては不可なり。此度は明治十二年に遷化になられたる。當寺の御先代勸學發願院力精師十三回忌になりましたに就き師の存生の昔教育を受けたる人々打集りて法會を修む。追講會をせられる。よりて原口勸學か出張になる筈のところ此頃病氣にて臥褥せらるゝにつきとぞ拙僧に來てくれとの事故。拙僧が參ることになりました。此力精師は。原口勸

學より年齢か少し下である。拙僧はまた力精師より二十才ほど下である。原口師や。若州の栖城師は。龍華曇龍師の門人で。拙僧は栖城師の門人である。力精師は曇龍師の晩年の弟子にて。ともに栖城師の許に留學せられ拙僧も數々面會いたし。當源光寺へも参りたこともありました。學問の筋合がこのをりゆへ。原口師の代りに拙僧が参りたのは。叔父の名代を甥がつとめ祖父の名代を孫がつとめるとでも云ふべきものである右等の關係の深き力精師の十三回忌の事故たどへ参らずとも師の存生の時の事を想像す。況んや参りて見れば。猶更である。参集の人々も皆此力精師の教化を受られし方々であらふが。定めし色々當時のことを想像せらるゝであろう學者も随分多きものであるが。就中温厚篤實なること比類なきは。此力精師でありた。諸君も唯在世の昔箇様なる事もありた。加様なる話も

聞たと想像するに止らず。其教化の懇篤なりしを思ひ出で。彌増に法義相續せらるゝが所詮である。さて御讚題の御文は。存覺上人の御製作の破邪顯正鈔の中の御言である。此度追講の講題か。眞俗二諦と云ふのであるから。此文を思ひ出して讚題にそなへた。方今は眞俗二諦の教と云ふことは。世人皆眞宗特有の教理の如く思へども。存覺上人の御時代杯は。諸宗猶盛んにして。何れも豊を並へて弘通し。南都叡山の佛法の儀式は。朝廷にも厚く御崇敬あらせられ一月早々の御修法より。年末の佛名會に至るまで。佛法の儀式を以て。王朝の法典となされたことが多ひ。王法佛法即眞俗二諦互に相扶けて人民を調御なされる。即ち破邪顯正鈔の文にも。これによりて上代と云ひ當時といひ。國土をおさめまゝす明主みな。佛法紹隆の御願をもはらにせられ。聖道といひ淨土といひ。佛教を學する

諸僧。かたどけなく天下安穩の祈請をいたしたてまつるとの玉ふものは此事である。然るに眞宗の人々は。一向専念の主義をまもり。俗に所謂おかたまりと云ふ風ゆへ。諸宗の人々より。眞宗の人は佛法を疎末にする。自餘の佛法を疎末にする。是れ即ち天皇陛下より厚く御歸依あらせられたる御儀式を疎略にし。王法を忽緒するものなりと。無實の云ひかけをなす。奏聞することさへあるに至る。依て存覺上人が。眞宗の教理をも深くわきまへず。剩へ弘通を禁止する。杯のことありてはならぬゆへ。辨護なさらねばならぬ。是は無實の風聞である眞宗の行人いかてか佛法王法を疎略にせん。眞俗二諦の化風を守るの妙宗なりと。其邪を破りて正を顯さんとして此御教示か出たものである。佛法と王法とは。此日本に於ては。わけて。密着の關係がある。佛法を以て王法をまもり。王法を以て佛法をあ

かむ。一向専念の行者なんで王法を忽緒致しませよう。あくまで王法を崇る故に。御儀式は悪さまに申しませよう道理はないと仰せられた。これのみにては猶判然せざるか如きも。中興上人のうゑで云へばよくわかる諸法諸宗を誹謗することを嚴禁し玉ふは。佛法を疎略にするなどの御誡め。又王法に對しては。世の中に於て物忌と云ふことがある。念佛の行者は此等に迷ふものにあらざるも。王法に備りてあることを遠慮なく毀つは甚たよるゝくない。世間にも公方にも對してはなとかものを忌まさらんやとの玉ふ。そこで往生の一大事に付ては。一向専念。處世の路に於ては王法を本とし仁義を先とし。世間通途の義に順せよ。諸宗を誹るな等の教訓が。よく世の中にしみわたりに。遂に今日では全く世の誹りを受けぬようになり王法佛法眞俗相資と云ふことは。まるで眞宗の特有の如くなりたも

全く中興上人の感化力である。故に眞宗の行者は此等の事を忘れず
 王法を忽緒としてはならぬ。上にも申す如く。全体我國は王法佛法の
 關係は極緻密である。昔は上天子様を初め奉り。深く此法に歸依し
 玉ひ。其尊きことに心を寄せ玉ふ故に。國民一般に知らず識らず此
 法に感化せられ。因果邪見杯の言語は。普通の言語となりて。大に
 人の惡念を制し善心を養成することゝなれりこゝが我經の上では。
 佛所遊履國邑丘聚。靡不蒙化。天下和順。日月清明。風雨以時。災
 厲不起。國豐民安。兵戈無用。崇德興仁。務修禮讓の文意である
 釋迦如來が佛法か弘まれば此法の御かけにて。世の中安穩に治まら
 と仰せられた通りになりてありた。さて今日の世の有様は如何であ
 りまじよう。往時の事に比べて見れば今日は佛法弘通とは云へとも
 人心中に立入りて觀察すれば。昔とは大違ひになりて。人心の中に

佛法其跡を絶ちて。外道邪宗が入り満ちてある。それまでにはいか
 ずとも。本統の佛法はわからぬ。因果邪見の道理は知らず。我儘氣
 儘になりて。法律の下さへくゞれば其良心耻すべき事をも躊躇なく
 働くと云ふ有様にて。人氣は次第に暴惡になる故に。王法佛法共に
 衰へて。村の人氣處の人氣。次第に惡しくなりて。日本全國の治り
 がわるいから。天皇陛下の大御心をなやますことになる。其證據は
 昨年十月三十日に御出になりたる勅語にてわかりてある。日本人民
 は祖先の昔に立戻りて。克く忠に。克く孝に。兄弟に友に。夫婦相
 和し。朋友相信と。恭儉己を持ち博愛衆に及ぼし。祖先の遺風を顯
 彰すへき旨をの玉ふてある。故に諸宗は兎も角も此眞宗有縁の人々
 は。能く二諦相資の訓を腹に入れて。佛祖善知識に對し奉り深く其
 慈訓の趣意を領して。佛法王法共にうるはしくせねばならぬ事であ

る。上にも申す如く。二諦の教は今眞宗特有の如くなりてある。然らば世の中の人々も望を屬する宗徒である。責任の重きわけである。佛祖善知識に對し奉り。今上帝陛下に對し奉り。其慈訓に報ひ奉らねばならぬ。今更に眞宗の法義に就き。眞俗二諦とは如何なることぞと云ふに。別途の法門の上より頂けは。此二諦の行相は皆信心の用きである。御文章に祖師聖人御相傳一流の肝要は唯此信心一にかざれり。これを知らざるを以て他門とし。これを知れるを以て眞宗のしるしとすとある。此信心は何の用ぞと云に。未來報土に往生して轉迷開悟の大目的を遂ぐる所のものである。其体は無漏の佛智にして佛様の御慈悲のそのまゝが衆生の心中に入り満ちて下さるのである。故に此信心をいたゞけは思内にあれば色外に顯るの道理にて。身口意の三業共に其所爲皆法にかなふ振舞となり。いやで

もおうでも俗諦王法をうつくしくまもらねばならぬようになる。これを御一代記には信をわたらば同行にあらく物をも申すまどきなり心とぐべきなり。觸光柔輦の願ありとの玉ひ。又觸光柔輦の願候ときは。心もやはらぐべきことなりとの玉ひ。御文章にも。行者のわろき心を如來のよき御心と一体になさしめ玉ふを佛凡一体と云ふとの旨をの玉ふてある。故に此一体の功德が。或時は身業の用となり。或時は口業意業の用となり。如法如實に掟がまもられる。これか鳥の双翼。車の兩輪に御たとへなされる譯である。しかれば信心獲得の人々はさす手引手に氣をつけて。王法を大切に守らねばならぬ。これがすなはち佛恩報謝である。此用きは全く信心が本である。釋迦彌陀の慈悲よりぞ。願作佛心はなごめたる。信心の智慧にいりてこそ。佛恩報する身とはなれとの給ふ。身口意の三業内心外相に

能く教訓をまもり。此世も目出度く。未來も目出度く。天下和順日月清明風雨以時災厲不起國豐民安の文の如き御利益を蒙るが此二諦の教をまもる身の幸福である。

○眞俗二諦

(後席)

前席に於ては。總體佛教に於ては王法と佛法と。眞俗の二諦が鳥の片羽で飛ばれぬ如く。車の片輪で走られぬ如く。相資はてゆかねばならぬと云ふことを御咄し申しました。當席にて。眞宗の教義に就て。別して二諦の關係を御咄致しましよう。前席にも一寸申した通り。眞諦とは如來の慈悲を戴きたる信心にして。俗諦とは其信心が相形にあらはれて自ら王法を守り。うつくしく人道を履行できるものである。かやうに申せば。なせ信心が基になりて。世善を履行するやうになるのであるか。全体御當流では。善もほしからず惡もをそ

れなると云ふではないか。善根功德か入らぬ以上は。たとひ罪業は深重なりともさらにかまわぬ筈。餘所の宗旨のやうに廢惡修善して菩提を求むるに及ばぬではないかと云ふ人もあろう。こゝが大切である。なるほど善もほしからず惡もをそれなるとは祖師も申されたが。望め所がしかと定めてある。あたまから善がなくてもよい。惡人か淨土に往生するに適當なるものなれば。彌陀の五劫の思案はいらぬ。永劫の修行もいらぬ。我々が佛になるには。是非願行がなくてはならぬ。善を修し惡をたしなまねばならぬ。これが當り前の道理である然るに我々は無善造惡にして。とても出離の善根を貯へることができぬ。そこで其できぬ者を。佛になさるの御慈悲ゆへ。五劫の思案も永劫の修行もなされたのである。とゞのつまりは「如來ノ作願ヲ尋レバ。苦惱ノ有情ナステズシテ回向ヲ首トシタマヒテ。

大悲心ヲ成就セリ」如何に大悲心がありてもそれを成就する手段がなければ。回向と我等にふりむけ與へて下さることかできぬゆへに。大悲心から五劫永劫の御苦勞下さる。凡夫に回向下される萬善萬行を成就なされて。六字の中におさめ下された。此のおいはれを聞て安心するを。佛願の生起本末を聞きて疑ふ心あることなれこれと云ふとの玉ふたのである。本願が我がものになると即ち信心でありて。二河白道の御諭に。一たびは白道を本願にたどへ。一たびは信心に御たどへなされてある。此本願信心あるゆへに。善もほしからず惡もをそれなしとの玉ふたでありて「五濁惡世ノ有情ノ撰擇本願信スレバ。不可稱不可說不可思議ノ功德ハ行者ノ身ニミテリ」何の不足ありてか他の善を要すべき。我々の手許へふりむけて下された善根が。實に圓滿具足してあるゆへに。機の惡を見て案ト煩ふ

な。此本願をいたぐけよ。此本願を妨ぐるほどの惡はないぞよとをいへて下される。本願や信心をおしのけて。惡もをそれなし善もほしからずとの玉ふたのは決してなひ。それゆへ本願をいたぐきたる信者なれば。此信心の用きより三毒の煩惱はしばらくおこれとも。眞どの信心はかれらにもさへられずして。煩惱の下からやれく勿体なやと。御懺悔の心がおこり念佛相續する實に本願を妨ぐるほどの惡はなし「無碍光ノ利益ヨリ。威徳廣大ノ信サエテ。カナラズ煩惱ノユホリトケ。スナハチ菩提ノ水トナル」如來の御手許より云へば。無碍光のはたらき。戴いた手許で云へば。威徳廣大の信心の用きである。餘所の宗旨の人達のやうに。自から修善はつとまらぬゆへに。他力にすぎり回向の信心を得て。一心一向專修專念となられてみりや。南無阿彌陀佛の外はなし。此六字が萬善萬行の總体なれ

は。おのづから悪事をたしなむやうになる氷を解さんとして湯をかける。世界の空気が寒くなれば湯がトさに氷となる。火鉢の火を以て氷をとかす。火去れば又た氷る。然るに太陽次第に赤道に近きて。世界に陽氣が満ちてくれば。氷は自ら消滅して跡なし。自力の火や湯では。煩惱の氷も一旦は消たやうでも。跡には煩惱の冰山をなす。然るに此度は如來の御慈悲の陽氣にてけりて下さるいつもく御慈悲を忘れぬやうに相續すれば我力にてはなひ。如來の御かけにておのづから滅罪生善の利益がある。自力でなきゆへ善もほらからず悪もおそれなけれども。如來のおかけにて。五劫の思案永劫の修行より成就されたる。南無阿彌陀佛をもらふゆへ。身口意の三業。おのづから悪をさけて。善に進むやうになる。これを眞宗の眞俗二諦の教義と云ふのである。

○煩惱具足と信知しての一首によりて

煩惱具足と信知して。本願力に乗ずれば。すなはち穢身すてはてし。法性常樂證せしむ」この一首の御和讃は。善導大師の御教示によりて御製作なされし御讃文でありて。まづ初の二句は。二種深信と申して。即ち我々の御安心である。煩惱具足と信知してとは機の深信。本願力に乗ずればとは法の深信を述べさせられたもの。それから三四句の。すなはち穢身すてはてし。法性常樂證せしむとは。法聞の上にて得る所の御利益をお示しなされたものである。そこでこの四句の御和讃を伺ふと。證と迷の因果を御述べになりてあること。即ち煩惱とは迷の因。煩惱の原因があるによつて。種々の穢身の結果を受ける。穢身は即ち迷の結果である。又證を開くべきの道は。佛の本願他力による。この本願他力に乗じて穢身をすつるは即ち證

の結果で。これか因果必然の道理と云ふものである。さて因果の道理と云ふことは。諸君も能く知られる如く。如來様が始めて作り出されたと云ふことでも無く。たゞ世間必然の道理でありて。決して鳥を白い鷺を黒いと云ふ様な珍らしきことを云ふたものには無い。けれども前方では。因果と云ふ語は佛法の語とはかり世の人が皆思ふて居りた。處が近來になりてからは。學術上にも其他諸般の事にも。頻りにこの因果と云ふことを云ふ様になつた。喩へば病氣は不養生が原因たとか。又は世間の不景氣となるは何が原因であるか。又繁昌になるは何が原因であるか。何様云ふ事をすれば何様云ふ結果が來るかとか云ふ。又水は何故に凍るか。寒氣に遇ふたが原因である。氷の解けるは何が原因であるか。暖氣に遭ふたが原因である。寒暖計の昇り降りするも皆寒暖によりての原因結果と云ふものである。

る。是等は皆世間の學術上其他諸般の事に就いての因果であるが。佛の説き玉ふところは是等の小さき因果では無くして。三世の因果。我々の迷と證との原因と結果とを御説きになるのでありて。何故に迷ふか。又如何にして迷を離れるか。貪欲。瞋恚が迷の因となる。今彼の小兒が學校に行きて書物を讀み。算術を覺ゆるが。これらは皆習熟として習ひ熟した力によりて得るのである。處が貪欲と瞋恚と云ふことは。別に稽古もさゝぬけれども。生れながらにして能く知りて居る。これを苦惱の煩惱と云ふ。又食ひたいものを食べさせぬはよろこび。着たいものを着せぬとおおると云ふことは誰も教へぬけれども能く知つておる。是を順逆の煩惱と云ふこの煩惱が種々の縁に逢ふて起ることが無數である故に。これを八萬四千の煩惱とも説かれてある。この煩惱が即ち迷の因となりて永く生死に流轉する。

そこで迷は悟の裏。悟を求むるは迷の裏を求むるのである。故に斷惑證理とて。佛は八萬四千の法門を説いて以て八萬四千の煩惱を治し玉ふのでありて。煩惱を斷つは悟に至るの道故に。一を斷ずれば一を得。二を斷ずれば二を得ると云ふ工合で。終に八萬四千の煩惱を斷ト盡して悟を得ると云ふ場合に至るのである。而して今の御和讃に。煩惱具足と信知して本願力に乗ずればと仰せられたは。坐禪觀念。種々の修行をして。煩惱を斷ト盡して證を開くかはりに。本願力に乗トて易く往生をさせていたゞくと云ふことで。而して本願力に乗ずれば何故に煩惱を斷せずして悟ることを得るかと云ふに。阿彌陀如來の因位の昔。衆生佛にならずば我正覺とらトと誓ひたまひしが。終に其願が成就して阿彌陀如來と御なりなされたのでありて。和讃には。如來の作願をたづぬれば。苦惱の有情をすてすして。

回向を主とらたまひて。大悲心をは成就せり」とあそばされてありて大悲心とは。佛のたすけたい〜と思召す御こゝろその回向を主とし大悲心を成就し玉ふことを。佛か菩提の有情を我か助けぬならば。又何れの佛のたすけ玉ふべきぞとて。無上の大願をおこし玉ふたと云ふのである我等にも少位は助けたい救ひたいと云ふ心もあるので。彼の昨年（おのづか）の美濃尾張の震災の時なども。各幾分かの慈悲心と云ふものは起るのであるけれど。なか〜これを救ふに力が及ばぬ。然るに阿彌陀如來は。我々を助けたいとの願に。必ず助くるの力を具へさせられてあるので。此處を曇鸞大師は。願以成力。力以就願とのたまふてある。又佛が難作能作の修行をなす玉ふを。經には。欲覺瞋覺害覺を起さず等と御説きなされて。この難作能作によりて成就なされた正覺が。廻向を主とらたまひて大悲心をは成就せりて

ある。これで助くる。これで参らすると御招喚くたさる。其勅命が聞けた處が。自力なれば煩惱を断つて悟らねばならぬことを。このみ此まゝで他力本願に乗じて易く往生をさせていたゞく。こゝを本願力に乗ずれば。法性常樂證せしむとの玉ふのである。善導大師は二河白道の御諭に於いて。詳しく御示しなされてあるが。其二河白道の御諭の中に於て。東の岸から西へ西へ行くもの。忽然として目の前に二の河が出来て。右に滔々たる水の河。左には炎々たる火の河が出来て。兎ても行くことは出来ぬ處に。幸にして中間に一の白道がありて。此道によりて彼の西岸に渡ることが出来る。白道とは清淨潔白を示すもの。東岸と西岸とは迷悟の二を示したものの。水火の二河とは行くことを遮るものを示したものの。そこで其迷の東岸より悟の西岸に至るに障るものは何であるか水火の二河。異境に向

ふては嗔恚か起り。順境に向ふては貪欲か起る。若し中間の白道が無きならば。兎てもく彼の西の岸に至ることは出来ぬ。而して其貪欲嗔恚の煩惱の二河の中間に白道ありとは。云ふまでも無き佛の本願力。その本願力に乗ずれば。法性常樂證せしむ。乃ち上來から云ふ通り。煩惱の原因によりて。迷の結果がある。其本願力に乗ずる原因によりて。迷をすて、悟を得ることが出来るのである。然るにもこれ自力の善根を以て行かぬはならぬと云ふのであつたならば何様であらふか。嗔恚が起れば直に火の爲に焚かれる。貪欲が起れば直に水に浸される。たゞ、起つた善根も實に何の役にも立たぬ。善根は善根にちがいないけれども作す下から直にそれが消されて仕舞ふのだから役に立たぬ讚岐の崇徳院様は。初京都に還り玉はんことを願はれて。五部の大乘經を書寫して善を修む玉ひ

が其後京都に還り玉ふこと叶はぬと云ふ處より。却てこれを魔王に
 供し玉ひ。先の善根はすつかり消されたと云ふことも。歴史に明な
 ることであるが。斯の如く我々も全く善根を修められぬものでは無
 いけれども。兎てもそれを作しとぐることが出来ぬのである。然る
 に佛の本願は。いかなる障にも障られ玉はず。水にもぬれず。火に
 もやけず。斯る大丈夫なる御本願故に。我等はこれ罪惡生死の凡夫
 曠劫より以來常に没し常に流轉して。出離の期あることなきいたづ
 らものと信知して。彼の御手丈夫なる御本願に乗托して往生する。
 即ち御文章にも「我身の罪のふかきことをばうちすて、彌陀にまか
 せまいらせて。一念の疑心なければかならず極樂にまいりて美
 とき佛とはなるへきなりと仰せられる。御讚文の。煩惱具足を信知
 して。本願力に乗すれば。すなはち穢身すてはてし。法性常樂證せ

しむと仰せらるゝも皆同ト御示しである云云

○論主の一心ととけるをば

曇鸞大師のみことには

煩惱成就のわれらが

他力の信とのべたまふ

論主とは論の主と云ふことで。天親菩薩のことなり。天親菩薩は。往
 生淨土論の造手なる故に論主と申すのである。論主が淨土論の初に
 世尊我一心。皈命盡十方。無碍光如來。願生安樂國と御自身の御領
 解を御述べなされた。其世尊我一心とある一心をば。曇鸞大師御釋
 をなされて。煩惱成就のわれらが。他力の信と御述べなされた。み
 ことにはとは。御言葉にはと云ふことである。然るに天親菩薩の御
 位は。五十二段の階級の中。四十段迄御昇りなされた菩薩にして。
 即ち十回向滿位の菩薩様である。其菩薩様の一心と。吾々が起す信
 とは同トことで有りそなたな筈がない。彼は歴々の菩薩の一心。是れ

は煩惱成就の吾々の信と。別々に思ふ者ある故に。鸞師釋して。天親菩薩の一心も。吾々の信も一にして異なることなら其故は同じ偈の終りに。普共諸衆生往生安樂國との玉ふ。其普共諸衆生とある共は誰を指す乎。菩薩の共にせんと玉ひら。往生淨土の道連は誰かと云ふ問を。鸞師は往生論の上に設けられて。其答に。觀經の九品に分けた機類の。下々品の者迄悉く共にする。此れより下のなひ下々品の機迄が道連れなりとある。然れば天親菩薩の一心と。吾々が信とは同一のものにて。彼れは歴々の御方の信。これは煩惱成就の吾々の信と區別す可きものに非ずと御示しくたされる。煩惱成就の成就は。具足と云ふと同一ことで。揃ふて欠け目のなきことである。即ち吾人は。貪欲も瞋恚も愚痴も凡て一切の煩惱を揃へて欠くることなき故に。煩惱成就のわれらかとの玉ふ。天親菩薩の一心

も。吾々の信も。自力なれば智惠格別なる故に信も亦格別なる可けれども。今は佛回向の他力の信故に。菩薩の一心も吾々の信も一にして異なるなきのである。なほ氣車に乗る如きものにして。健足の者も。弱足の者も其足力を用ひず。一に氣車の力に任す故に。健弱の差別なく。共に遲速なく同一場所に達するは。自の足力を用ひず他の氣車力に依る故でありて。今又同トことで。決して歴々の御方は賢にして信ト。我々は愚にて信すと云ふことではなく何れも佛回向の他力に乗ずる故に。其信に差別なくして共に同一佛果を得のである。故に鸞師は論主の一心を釋して。煩惱成就のわれらが他力の信との玉ふ。猶ほ次の贊文に至りて委しく申します。

盡十方の無碍光は
無明のやみをてららつゝ
一念歡喜するひとを
かならず滅渡にいたらしむ

此の和讃は。鸞師の御釋中の御こゝろを御示し下されたものにして
 盡十方の無碍光とは彌陀の御名にして論主殊に言を盡して讚嘆と玉
 ひし御言葉である。此の盡十方の無碍光とは。光明の徳にして。光
 明は智慧のことである。光は能く闇を破るもので。日光にせよ。ラ
 ンプの光にせよ。光は總て闇を破すなれどもそれ／＼に碍がある。
 然るに彌陀の光明は。日輪の光りなごとは雲泥の違ひにて。此彌陀
 の光明は。無限にして十方を盡して至らぬ處なく。云何なる物にも
 礙へられぬものであり。故に盡十方の無碍光と云ふ。日光等は碍り
 ありて。高さ塀あれば其内はこれが爲めに明なく。又閉ぢさりたる
 藏の中。或はトンチルの如き處には日光碍はられて至らぬのである
 故に日光等は有碍。佛光は無碍と云ふのでありて。彼の日光は形の
 光。此の佛光は心光にして。形の光ではない。吾々無明の闇も亦形

ちなき闇。形ちなき吾々の闇を。佛の心光が能く照破して碍ないと
 云ふことになるのである。前の讚の如く煩惱成就の者も礙るゝこと
 なくして能く佛の心光に照され得るこれが無礙の光明である。
 さて佛の光明の無限に就いて。吾人の心の働きは。有限であるかま
 た無限であるかを。今譬を以て辨トますれば。初めに吾人の耳目等
 の能力は云何と云ふに。吾人の耳目は能く聞き能く見るものである
 が。今暫く目の一つに就て云へば。目は能く見ると云ふても。物を
 見るに能く見ぬるとか。うといとかの差別がある。この差別のある
 ことを以てしても目の能力は有限なることを知られる。又詳しく云
 へば視力の届く處の物は。其の物体の詳細なる處迄も見別け得るな
 れども。漸く視力の及び難い處の物になりては。彼は馬である人で
 ない。彼は馬でない牛であると云ふ位なことは見別け得るなれども

其詳細に至りては。視力已に及ばずしてさつぱり分らぬ。又この京都市中より比叡山を望み見るに。山上に一の黒い塊があるが。あれは樹であるか又は外のものであるかと云ふ位な粗なる事でもさへも見分けることが出来ぬ。されば吾人の視力は有限にして無限では無いが。併しながら此有限の視力に接足をして能く物を見るを得ることが出来る其接足とは望遠鏡でありて。望遠鏡は吾人の視力を接足すの器にして。十里のもの二十里のもの等と種々差別ありて。天文に用ゆるものは能く月体までも窺ひ得る。これすなはち吾人の視力の及ばざる處を接足するのである。然れども空間は無邊際と。限も涯も無きことゆへ吾人有限の視力に接足の出来るたけのこと。即ち望遠鏡の力の及ばざる處は矢張仕方が無い。してみれば云何程接足をしても。有限たることは免れざるのである。又物の詳細なることを見

るにも。接足をなす得る。この接足を顯微鏡と云ふ。此器を用ゆると。能く微細のものも見る事が出来るので。清淨と思ひし水の中にも此器を用ひて見ると。其中に無數の細虫ある事を知ると云ふ如きは。即ち吾人の視力を接ぎ足すと云ふものである。これにも二千倍三千倍等と種々に分れる。爾れども此の器の力の及ばざる處は終に又知る可らずと云ふばかりのことである。故に何れにしても吾人の視力は有限でありて無限でないといふことは明である。吾人の心も之に同トことで。種々様々に働いて。座しながら東京の市を胸間に浮べ。或は長崎の街を想像し。又神代の古へを考へ。又後の世の事々でも考へ得る。併し乍ら其の働きは有限でありて無限でない。過去を知ると云ふても幾億萬歳の古を知る能はず。未來を豫想し得ると云ふても幾千歳の后を知る事を得ぬ。依りて人間の心は目の視力

の有限なる如くにして無限に非ざることは直く分る。而して此の心の働きのも。肉眼の望遠鏡顯微鏡に於ける如く。能く接足をするこ
とが出来るので其接足とは何んであるか。定力である。此の定力に
依る時は。八万歳の古々をも考へ得る。而れども八万歳の限があり
て無限と云ふことは出来ぬ。依て接足して能く八万歳の古を考へ得
る共。其有限なる點に至りては五十歩百歩の論。矢張同トこと云
はねばならぬ。

佛は盡十方無碍光にして無限智。吾人は淺まらき有限智でありて。
有限の智を以て無限の智を推し測る事は爲し得ざることでありて。
譬は圍碁の初段の者は。二段の者の手を知る事出来ぬ如く。これは
其智の階級に差ある故である初段の者の智進んで二段の者と同ト様
になれば。其手自ら知られる。其手を知るは已に初段に非ずして二

段となりて居る故である。世間の事でも斯るもの。況んや凡夫に
て何様して佛智を測り知ることが出来ようや佛智を知るは唯佛のみ
故に唯佛與佛の智見との玉ふである。さて煩惱成就の吾々の闇より
盡十方の無碍光の光を見ることは得ざることであるなれども。佛の
光明の方より。吾々の闇を破し玉ふので。即ち凡夫の有限の智を以
て。無限の佛智を知る能はされ共。佛無限の智を以て。吾人の有限
を攝し玉ふと云ふのである。故に盡十方の無碍光は。無明のやみを
てらしつゝとの玉ふ。一念歡喜するひとを。かならず滅度にいたら
しむとは。滅度は佛の悟りにて煩惱成就の吾人。佛の悟りに至るこ
とは實に容易ならざること。とかるに一たび他力の信を得る一念歡
喜の人は。佛力に依つて滅度に至り得るのである。滅度は翻譯した
言葉でありて。即ち大涅槃の事である。滅は一切の迷を滅する故に

度は此の娑婆の岸より。淨土の彼の岸に度し至らしむると云ふ事度と云ふ。即ち無上のさとりを得ることである。さてこの滅度のさとりと云ふに付いても。吾人は生死を逃れぬ境界であるが。佛の悟は不生不滅である。若し佛に生あれば滅も無ければならぬが。生なき故に滅も亦ない。譬へば虚空の如く。生なく滅も無い。生あるものは必ず滅あることは。家を建つる初ある故。壞るゝ終と云ふこともある。山川湖河も皆同トことであるが。たゞ虚空は生なき故に滅もない。而るに虚空でも。家を建つれば夫れたけ虚空がなくなる様に思はれるけれども。矢張其様ではない。其家を取りのけると虚空は依然として元の如く。不増不減不生不滅。増もせねば減りもせぬ。これが虚空の虚空たる所である。今迷より滅と云ひ悟りより生と云へども。其實不生不滅の覺でありて。滅と云

へ共。此無限の境界不生不滅の悟は。即ち盡十方無碍光である。故に滅度に至らしむと云ふは。吾人をして此の不生不滅の佛と同トく寸分異らぬものにならし下さるゝのでありて。これが他教の兎ても及ばぬ處である。外教などでは。神の處に生るゝが究竟にして。其神と同トくなることは出来ぬと云ふことにて。猶は大豪富の家に入る事は出来るも。丁度奉公人か何かにはなり得るとも。主人とは決して成り得られぬと云ふと同トこと。今彌陀は淨土の主なる故。我々が往生すれば片角にでも居る様に思ふ者もあるか知らぬが。彌陀の淨土は決して其様なことでは無く。往生即生佛。々々即究竟であるかゝる廣大の利益故。兎ても行き難き様にあるなれども。そこが他力の御蔭。吾々佛の心をもらふて。吾々の心の闇の中へ佛の心光が入り満つる故。闇がなくなる。闇なき故に光明の中に在り。戸を閉

ちきりた今迄の闇が。戸が開いて外の光明と通じて見れば。其光に内外の別なく。闇は自ら退く。其内外無別の處を。讚に功德の寶海みちくして。煩惱の濁水へたてなるとの玉ふ。海水に川水海水の區別なく。同一鹹味の海水なるが如く。吾人有限の智と。佛無限の智と融即すれば。互に其區別のある事はない。依て佛心凡心一つになるところをさして信心獲得の行者と云ふともの玉ふ。世間にて親の身代を子が受くれば親の身代其儘子の身代の如く。又弟子が師の智を受くるに。これが弟子の智慧これ師の智慧と區分あるものに非ず師の智即弟子の智となるのである。今盡十方の無碍光の無限の智にて。吾人の闇を破する場合を一念歡喜との玉ふ。一念は一とおもひのこと。南無と歸命する一念とのたまふて鸞師の御譬々に藏に千年の闇あり。又十年の闇ありと云ふに。この闇を破するに。こちらは

千年間の闇故に千年かゝり。或は此方は十年間の闇故に十年かゝると云ふではない千年の闇を破するも。十年の闇を破るにも。照破する時は同一時であるとの玉ふ。吾々無明の闇が光明に照された時。即ち信心獲得と往生の定まるのである。さてまた光明と闇とが入り亂れてある様に思へ共。光明が照した所即ち闇なきの故に。行者のわろさ心を如來の御よきことと同一のものにならば玉ふなりとの玉ふこの時の一念は歡喜の一念にして。之を又廣大難思の慶信ともの玉ふ。一度ひ歡喜信を起せば能照所照機法一体となる。此のごとく廣大の利益を得る事は他力回施の他力の然らしむ所と喜び申さねばならぬことでありませす。

無碍光の利益より 滅徳廣大の信を惹て
かならず煩惱のこほりどけ すなはち菩提のみづとなる

此前にお話し申した處に。盡十方の無碍光は。無明のやみをてらら
つゝ。一念歡喜するひとを。かならず滅度にいたしむ」と。佛の光
明の利益によりて。我々の淨土に往生すべきことを。一束ねに仰せ
られたが。其光明の利益を。これより四首に分つて譬喩を引きて詳
しく御示しなされるものである。四首の中に二首づゝ譬喩が違ふてあ
つて。初二首は氷の譬。後二首は川々の水の譬。もとより譬喩はい
ろくくと似寄りたることを以て其義理を明にするのでありていろ々
々の事をいろくくに譬へらるゝことであるが今はまづ煩惱と菩提と
を氷と水に御譬へなされたので。この氷と水の譬に就いては。人王
經に煩惱の氷とけて菩提の水となると云ふことが説いてある。又煩
惱と菩提のことに就いて煩惱を斷せずして涅槃を得ると云ふことは
維摩經に出てありて。是等の御經に説いてある處がおなとと意なる

のであるが。全体煩惱は悪いもの故に除けて仕舞ふて。而して菩提
を得ると云ふが小乘淺近の説でありて。大乘の法門になると。煩惱
をのけると云ふではない。それを轉じて菩提のさとりを得ると説く。
そこで通佛法の説で。除けると云ふは小乗の説。轉ずると云ふが大
乗の説と分れてある。故に後の川水の水の譬でも。川々の水を除けてと
云ふではない。其川の水を轉じて。そのまゝが潮の一味になると云
ふ譬である。近く世の中の事で云ふて見ると。世の中には人の性質
の利なものゝ頑なものがあるが。遲鈍なものが一轉すると丁寧と云
ふ好い方になる。又利發なものが一轉すると。小さかといと云ふこ
とが變りて。敏捷と云ふことになる。銅鑊は湯が冷め易いけれども
速く煮かすと云ふことに轉用すれば好い。又鉄瓶は煮きにくいけれ
ども冷めることの遅いと云ふ方に轉用すると好い。これは唯眼前の

事を一寸譬に引いたことであるが。前に云ふ如く。通佛教では。煩惱を除けてと云ふが小乗の説方。煩惱を轉トてと云ふが大乗の説方である。そこで今我が眞宗の法門は。煩惱を取つて除ける方か。これを轉トてと云ふ方かと云ふに。一寸考かへると。罪業深重の惡機地獄ならでは越くべき方も無き淺ましきものとして見ると。いかにも此儘で佛になりそうには考へられぬ。さうも別々でありて。この煩惱惡業を取つて除けねばならぬ様に思はれるされども決して其様では無い。佛の方より轉トて下されて。佛の力で以て我々を佛になし下さるゝ。其工合を今譬を以て御示し下さるので。まづ氷の譬の上で云へば。一斗の水の氷は。矢張一斗の元の本体を失はぬが。凍りた處で氷と云ふ名が施される。よつて今にもこの氷が解けるなれば。元の水となることに於て少しも異りたことはない。我々もまよ

いによつて。貪瞋等の煩惱によりて斯る煩惱具足と名の付く。淺ましき惡機となりて居るが。この惡業煩惱が。盡十方無碍光の力によりて轉トて仕舞ふ。光明は毎度御話し申す如く慈悲でありて。その慈悲が當り障りなく行きとゞく。これを盡十方無碍光と云ふので。恰度春の日光が物をそたてる如く。佛の光明が照すと。我々の煩惱惡業。即ち煩惱の氷が解けて。菩提を得られると云ふことになる。其佛の光明に照された處が威德廣大の信心。威德廣大とは信を讚美したもので。前に他力廣大威德の。心行いかでかさどらまると仰せられてある。今我々がいたゞいた信心。その我々の信心が廣大威德なる筈は無き様なれども。我々が起した信心なれば威德廣大なる道理は無いが。この信心は我々が起したる信心でなく。佛の方より起さしめられたる信心。佛よりいたゞいた信心でありて。佛の光明が

威徳廣大である故に。信心も亦威徳廣大の理由がある。そこでこの威徳廣大の信心と云ふに就いて。よくよく考へて見ぬといかぬので前にも云ふ如く、煩惱を取除けて菩提を得ると云ふのでは無い。我々の煩惱の悪きころをすて、其後へ佛の御心を貰ふのではない我々の煩惱のころの中へ佛の大悲の光明が徹到する。これが即ち佛の心をいたゝひた他力廣大威徳の信心と云ふものである。今病を療治するのでも。手が腐つて其手を切捨て、其代に人造の手を附けて置く様なこともありて。名高い大隈伯の足も亞米利加に注文してこしらへた人造の足が接いである。これは切つて捨て、別に新に物を接ぐのであるが。又手なら手。足ならば足。其病の有るまゝを薬で以て療治して。切らず捨てず。其儘のなりで好くなる様にするのもある。我々の煩惱の心をのけて。其のけたあとへ別に佛心を

得るを思ふと間違ふて居る。衆生貪瞋煩惱中。能生清淨願往生心。衆生の貪瞋煩惱の中に。能く清淨の願往生心を生ずると仰せられる貪瞋煩惱は我々の持前。慾を起し。腹を立てる我々の心の中。この我々の心の中へ佛の光明が到り届いて下されて。水火の二河。貪欲も瞋恚も起りつゝ。金剛の信心は決して是等貪瞋煩惱に障へらるゝことなくして。自然と心の中が。きよらかにすゝしくなる。これが即ち威徳廣大の信心を得たと云ふものである。手やら足やらが病氣で痛むとか。病氣で動かぬとかある時に。痛まぬ手。動く手と切りかへると云ふのでは無い。薬がきゝて。薬の力で以て。痛んだ手が痛まぬ様になり。動かなんだ足が動く様になつたので。痛んだ手。動かなんだ足が其まゝ痛まぬ手。動く足となる。我々も佛の光明の薬がまわりて來たで。煩惱具足の其まゝ威徳廣大の信を得ると云ふ

ことである。これを蓮如様は。衆生をうつらひたまふ。うつらふといふは。衆生のころをそのまゝおきて。よきころを御くわへさふらひて。よくめされ候。衆生のころをみなとりかへて。佛智はかりにて別に御みたて候ことにてはなく候と仰せられて。衆生の心を皆取りかへて別に善くなし下さるゝのでは無く。衆生の心を其まゝ置きて。佛智を加へて善くなし下さるゝと御示し下される。このよきころを御くわへ候ひてよくめされさふらふと云ふところが薬のまわりて來た處ではいとおしいにくい煩悩も。佛智に向ふては。すつかりと解けて無くなりて仕舞ふ。これが我々の起す信でなく。佛よりおこさしめたまひたる威徳廣大の信。この佛の光明よりいたゝひた信心故に。かならず煩悩の氷がとけると云ふことである。そこで又能く考へねばならぬことは。斯る尊い廣大の信心であるなれ

は。信の得られた人は。ますこと煩悩の起らぬ様になりそうなもの。然るに煩悩は止みもせずして。矢張慾も起れば腹も立つ。これは一体何様したものであるかと云ふ人もある。こゝを能う考へぬといかぬ。信後の人なりとも矢張煩悩が起るに相違ないなれども。煩悩は起りても。佛の方より見る時は。煩悩の起る其まゝが起らぬも同トこと。なせなれば起りてもく。起る端から消けて仕舞ふ。一たび貪慾の心が起れば。ア淺まらやとおわびを申す。これが所謂。隨凡隨懺悔であり。起る筈は無いなれども。我々の業の盡さぬ間は起る。起るは起りても起る端から消けて行く。よりに煩悩の氷解けて水ばかり。起るは起るに違ないが。起りても起る端から佛の光明に照されて懺悔して消けて行きて。百度起りて百度あやまる。百遍凍りて百遍解け

て。決して未來の惡報を招くことは無い。素りこの煩惱の起ること
 は。我々の無始より以來の業であるから。此迷の世の中に命のあら
 ん限は起る。起りても決して恐るゝに足らぬ。起る端から消えて仕
 舞ふ煩惱故に。因中攝果して云ふと。すでに煩惱の根が絶えて仕舞
 ふたとも云へる。即ち威徳廣大の信を得るからには。往生の正因を
 すでに成就したものでありて。彌陀の御淨土にまいるに間違の無い
 不退の位に入つたものである。病氣等のこと云ふて見れば。藥を
 飲みてもく。又してもくも病氣が後戻りして治らぬと云ふは。
 これは不退でない。又藥が病に適中して。おい／＼病の力は衰へ。
 いや／＼これで間違ないと云ふ處になつたが。さてそれなれば身体
 は少しも痛は無いかと云ふと。矢張時としては痛も起り。或はとひ
 れも。するけれどもこれは病氣の餘勢が出てくるばかりで。直ぐと

治りて病氣はいよく全快の方へ向ふと云ふ處で。これでこそもは
 や退かぬと云ふ様になるので。我々も此身の有る限は。業によりて
 煩惱も起るなれども。起る煩惱は起るはしから消えて行きて。決
 て未來の惡報を招くことなく。いや／＼起らぬと云ふ處になりては。
 無上涅槃の證を開くことである。

罪障功德の體となる

こほりおほきにみつおほし さはりおほきに徳おほし
 これは前のかならず煩惱のこほりとけ。すなはち菩提のみつとなる
 とあるを、打ちかへして罪障と功德とを一緒に云はれたものである。
 世間でも惡に強いものは善にも強いと云ふことを云ふか。これは好
 く云ふたことである。成程。惡を推しきつて爲る位のもの故に轉
 て善の方に向くと。又推しきつて善事をする。そこで我々凡夫は罪

も多^{おほ}いかわりに。又^{また}斯^かる淺^{あさま}ましきものをと。いよく、本願^{ほんがん}に歸^きする處^{ところ}もある。處^{ところ}でこゝに不審^{ふしん}を起^{おこ}すものがある。それは菩薩^{ぼさつ}様^{さま}方^{がた}が彌^や陀^たの本願^{ほんがん}に歸^きする時は。菩薩^{ぼさつ}方^{がた}には罪障^{ざいしょう}と云^いふて。我^{われ}々の様^{よう}に惡業^{あくごう}のあるのでは無^ない故^{ゆゑ}に。罪障^{ざいしょう}功徳^{こうとく}の體^{たい}となると云^いひ。さはりおほきに德^{とく}おほしと云^いふ時には。菩薩^{ぼさつ}方^{がた}は罪業^{ざいごう}が無^なくて。却^{かへ}つてうつくしく成佛^{じやうぶつ}することが出來^きぬかと云^いふに。決^{けつ}して其^そ様^{よう}云^いふことでは無^ない。譬^{たと}へて云^いふと。佛^{ぶつ}の功徳^{こうとく}はかきりの無^なき御光明^{おにこうみょう}であるが。今^{いま}假^{かり}に百のものと限^{かぎ}をつけて云^いふて見^みると。九十^{くじゅう}をもちて居^をるものは十^{じゅう}だけをかりて百^{ひゃく}になる。又^{また}五十^{ごじゅう}のものは五十^{ごじゅう}をかりて百^{ひゃく}となる。又^{また}それより下^{した}のものは澤山^{たきさん}にからねばならぬ。澤山^{たきさん}にかりた處^{ところ}で同^{おな}トく百^{ひゃく}となるので。百^{ひゃく}より餘計^{よけい}にはならぬ。菩薩^{ぼさつ}方^{がた}が十^{じゅう}を貫^{くわん}ふて百^{ひゃく}となるも。凡^{ぼん}夫^ぶが百^{ひゃく}ながらを貫^{くわん}ふて百^{ひゃく}となるも貫^{くわん}ふて百^{ひゃく}となるは同^{おな}トこと

である。以前^{いぜん}は德政^{とくせい}と云^いふことがあつたが。丁度^{ちやうど}この德政^{とくせい}のよ様なもので。德政^{とくせい}の時^{とき}には借金^{しやんきん}の多^{おほ}い程^{ほど}。餘計^{よけい}に德^{とく}になる。けれど餘計^{よけい}に貫^{くわん}ふからと云^いふて。決^{けつ}して少^{せう}なく貫^{くわん}ふたものより物^{もの}が澤山^{たきさん}になるのでは無^ない。たゞ餘計^{よけい}に貫^{くわん}ふ勘定^{かんじやう}になると云^いふばかりである。貧^{びん}乏^{ぼう}なものが德政^{とくせい}によりて餘計^{よけい}に貫^{くわん}ふて。それで俄^{にわか}に金持^{かねもち}の上^{うへ}になると云^いふことでは無^ない。今^{いま}も其^{その}如^{ごと}く惡^{あく}の強^{つよ}き。罪^{つみ}の重^{おも}きものが。さかしまに菩薩^{ぼさつ}方^{がた}の上^{うへ}へ行^いくと云^いふことではない。たゞ罪業^{ざいごう}深重^{しんじゆう}のものほど餘計^{よけい}にたすけを受^うけると云^いふことである。餘計^{よけい}はこころを受^うけて平等^{びやうどう}になると云^いふことである。德政^{とくせい}の時^{とき}には貧乏^{びんぼう}人^{じん}ほど餘計^{よけい}に貫^{くわん}ふが。餘計^{よけい}に貫^{くわん}らふからと云^いふて。人^{ひと}の上^{うへ}になるでは無^なく。又^{また}人に誇^{ほこ}ることは無^ない筈^{はず}である。併^ししながら餘計^{よけい}に貫^{くわん}へば貫^{くわん}ふほど喜^{よろこ}ばねはならぬ。今^{いま}我^{われ}々の成佛^{じやうぶつ}するにも罪障^{ざいしょう}の重^{おも}い。つまらぬもの程^{ほど}に

餘計に利益を蒙むるの故に。さはりおほきに徳おほくと仰せられたものである。處でこの二首は氷の譬。この下の二首は。川々の水の海に入つて轉すると云ふことを御譬へなされたものである

名號不思議の海水は

逆謗の屍骸もとまらず

衆惡の万川歸らぬれば

功德のうらほに一味なり

名號は南無阿彌陀佛の名號。この名號は不可思議の功德ありて。阿彌陀佛に南無と奉るものは。忽に轉惡成善と。惡を轉して善となり下さるゝの力がある故にこれを名號不思議の海水と仰せられる。海は川々の水が流れ込みて。清らかな水濁りた水の別は無く。皆平等に潮の一味となることであるが。今この名號不思議の海水に歸入すると。直に功德のうらほの一味となる。名號の海水に歸入するとは阿彌陀佛に南無と奉る一念の信心。これが即ち威德廣大の信。この

信を得る處に惡は悉く轉じて善となり。功德のうらほに一味なりと云ふことになりて仕舞ふとの御示しである。さて此處に。逆謗の屍骸もとまらずとあるが。この屍骸の止まらぬと云ふことは。海に八種の徳を説く中に。不宿屍骸の徳と云ふがありて。海は清淨にして。不潔なる屍骸を止めぬと云ふので。海に流れ込んだ屍骸でも。難船をこしてはまつた屍骸でも。魚の屍骸でも皆岸へ打上けて仕舞ふと云ふことは皆人の知つて居ることである。そこで今この不宿屍骸の徳を持ちこんで。名號不思議を信する時には。逆謗も其まゝには止まらぬ。五逆のものも。謗法のものも。皆廻心懺悔して決して其まゝでは居らぬ。辨圓が害心を持ちて居りたも。後には廻心懺悔して如法の信者となる。其外例證を云へば澤山あるが。例證を出すまでも無く。逆謗のものも。皆其まゝには止まらずして。名號海には

た、功德のうらほのあるばかりと云ふことである。そこでこれが無いと。海は皆入りて穢きものも入る。濁つた水も入るで海は清浄では無い。彌陀の本願も流れこみであつて。五逆のものも謗法のものも入る。故に彌陀の本願は決して清らかでないといふ様になる。そこで逆謗の屍骸もとまらずと。決して其形のままを名號海中に宿めて置きはせぬ。悪も皆轉じて一味の功德水ばかりぞよと仰せられる。次も同く御こゝろである。

盡十方無碍光の

大悲大願の海水に

煩惱の衆流歸しぬれば

智慧のうらほに一味なり

此御和讃も前の讃とおなとく。川々の水の海に歸入するを以て譬へられたものであるが。前には名號不思議の海水と。名の方を出され今は盡十方無碍光と。体の方で仰せらるゝか。これは名と体とは不

二にして。南無阿彌陀佛の名も。盡十方無碍光の体もおなとくして決してかはりしことでは無いと云ふことをあらはされたものである。又前には業の方で衆悪と出し。今は其本で煩惱とある。煩惱とある故に。これの對に智慧とあり。前には業の方で衆悪とある故に功德とある。煩惱の惑も。罪惡の業も同くこと。智慧も功德も同くことであるなれども。語の都合によりて分ちて仰せられたもので。氷と水とに譬へての御和讃も同くことである。處で前に申せし如く。四首ともに皆轉惡成善のことを仰せられたもので。阿彌陀佛の歸し奉れば。皆うつくしくさとると云ふ事を御明しなされたものである。

○安樂佛國にいたるには

無上寶珠の名號と

眞實信心ひとつにて

無別道故とよきたまふ

これは前に。安樂佛國に生ずるは。無上の方便でありて。諸佛がこ

れをすゝめたまふとありて。其安樂佛國に到るには。何様して行くのであるか。東京に行くとか。長崎に行くとか云へば必ずそれく道の道が無ければならぬ。安樂佛國に到るのは。何様云ふ道によりて行くのであるかと云ふに就ての御しめしでありて。これは鸞師の論註の中に。同一念佛無別道故とあるに御據りなされたもの。而して論註に此無別道と仰せられたは。何様云ふ處からかと云ふと。淨土に往生する者は皆兄弟である。遠く四海を通ずるに皆兄弟である。何故なれば。同一に念佛して別の道無きか故に。同一の道によりて淨土に往生するもの故に皆兄弟の様なものであると仰せられたことで。本この四海兄弟と云ふことは論語にある語でありて。これを鸞師が。儒教でさへも四海兄弟と云ふ。まして我が佛教で兄弟が無ければならぬ。何故なれば同一に念佛して別の道なし。道を同ふする

者であるから兄弟と云ふてよきことであると御意なされたることである。そこで今この御和讃は。この無別道故と云ふ語を御引きなされて。安樂佛國にいたるには。無上寶珠の名號と。眞實信心ひとつにて。決して外に別の道は無いぞよと仰せられたることである。孟子にも。誰か出づるに戸によらざると云ふて。人が家を出るには是非戸口を通つて出ねばならぬ。人たるを得ようと思ふものなれば。誰か仁義の道によらざるものがあるかと云ふことがあるが今もこれと同トことで。往生には他の道はない。此道によらずして別の道から行かうと云ふことは出来ぬ。たゞ同一念佛の道ばかりであるぞよとのことである。そこで又何故無別道であるかと云ふに。中の句に無上寶珠の名號と。眞實信心ひとつと仰せられる。これが肝腎なることで。無上寶珠の名號は行体。眞實信心は信者の信。信と云ふこ

とは當なくして信ずると云ふことは出来ぬので。お前は何を信じて居るか云ふに。何と云ふ當は無いけれども。たゞ何かしらに信じて居るのぢやと云ふ様な馬鹿なことは無い。信するものから。信せられることが無ければ信と云ふものは無い。一寸世間のことで云ふと。世間に自ら無宗教家であると云ふものは随分澤山あるが。其人に尋ねて。何故無宗教であるかと云ふと。イヤドウモ信すべき宗教が無いと云ふ。其様ならば。諸種の宗教を一一に調べて。いよく信ずるに足るの宗教が無いと信じて。それだけの見識が立つて居るのかと云ふと。イヤ其無ても無い。たゞ何にも無とぢやと云ふ様なれば。これはまた宗教たの無宗教たのと云ふ仲間にも入らぬ全くの方外なものであるそこで當ならぬ信心は起らぬて。前の句に無上寶珠の名號を擧げて。何を信ずるか。名號を信ずるのであるぞよ。南

無阿彌陀佛の御いわれを信ずるのであるぞよと。法体の大行を御擧げなされて。これを信ずるのぢやと仰せられる。全体行の字は。ゆくと。又みちとも訓む字でありて。ゆくと云ふは道をゆくこと。道は人を戴せて行かすめ。道があれば必ず行かれる。其行かれる道を。彌陀如來が御成就なされて。南無阿彌陀佛と云ふ道が出きた即ち法体の大行。のせてゆかせるの道である。これが即ち無別道の道である。名號の御いわれにて我々が往生することが出来る。處でそんならば。無上寶珠の名號ばかりで。これが無別道と仰せられたらよかりそうなもの。何故に眞實信心ひとつにてと仰せられてあるかと云ふに。それは道ばかりでは役に立たぬので。佳者ありと雖も食はされば其味を知らずと云ふ様に如何に御馳走がありても。それを食はねば薩張り御馳走にならぬので。行は信が無ければ用をなさ

ぬ。又信は行が無ければ起ることが出来ぬ。故にこの行信の二は相
 離るゝことの出来ぬ大事なものである。處で又行と信とふたつ別々
 にはならぬか。名號が因になるのであるか。信心が因になるのであ
 るか。名號と信心とのふたつが因になるならば。ひとつにて無別道
 故と云ふことは出来まい。又ひとつが因になるとなれば何方が因に
 なるのかと云ふ難が起る。これは能く會得せねばならぬところであ
 りて。この行信と云ふことは。所信について行と云ひ。能信につい
 て信と云ふて。其名は變りてあるけれども。其体は少しも變ること
 なくして同じことである。これを譬へて云ふなれば。倉にあるとこ
 ろでは粃種と云ひ。これを田に蒔くと直に苗となる。粃を離れて苗
 があるか。決して無い。倉にある間には粃と云ひ。田に蒔いて苗と
 なるけれども。其本体は決してふたつあるので無い。たまた其位置。

即ち置場が違ふから名前が變りて来る。今も其如く。佛の方にあり
 て名號。其名號を離れて信があるでは無い。南無阿彌陀佛の六字の
 名號のなり。たのめたすくるの御いはれのまゝが機の方の信心とな
 る。すなはち其體はかはることなくして。其位置が違ふ處で名が變
 りて来るのである。彼の嫁入も同じことで。里方の家の娘に相違な
 い。けれども先方へ行けば嫁と名が變る。そんなら娘の外に嫁が
 あるか。嫁の外に娘があるかと云ふと。決して別人では無い。嫁と
 云ふが即ち娘。娘が取りも直さず嫁であると言はねばならぬ。そこ
 でこの行を離れて信は無いと云ふ御意は。御文章には「信心とて六
 字の外にはあるべからざるものなり」と仰せられてある。そこで元
 來何の爲にこの名號が出来たかと云ふに。これを信ずると云ふいわ
 れを籠めて御成就なされた名號である故に。これを信ずるところに

於いて其徳を全ふするのでありて。苗となるべき粃である故に田に蒔きて苗となる。苗となりたる處で。粃の用があらはれると云ふと同じことで。これが衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心と仰せられるところ。この清淨心は佛廻施の清淨心。すなはち南無阿彌陀佛の御いはれのまゝをいたたいたのである。そこで此信も行も。一の南無阿彌陀佛に相違なき故に。鸞師は同一念佛無別道故と。念佛の中に信二をかねて。所信も能信も籠めて仰せられ。今この御和讃には。其中から分ちて。里では娘。先方では嫁となるのであると云ふ様に。所信の行と能信の信とありて。しかもひとつであるとして御示し下されたものである。又これを今もひとつ縮めて云ふなれば。南無阿彌陀佛とは何であるか。佛が我を一心にたのため。かならずたすくるとの御いわれ。所謂我を一心にたのまん衆生をば。かならずく

はんと云。本願をたてましくして。其願すでに成就して南無阿彌陀佛となりましますと仰せらるゝところであつて衆生のたすかる御いはれの出来上りたるところへ。其わけをつづめて。符牒をつけ。呼聲をつけて下されたものである。總體物に呼聲をつけて置くこと分り易いものでありて。數の道理でも。三に三を乗けると九である。四に四を乗ければ十六であると云ふことを。三々が九。四々十六と此様云ふ工合に九々で云ふと早く分る。別して割算の九々なごでも。三一三十一と云ふは。一を三で割れば三が立つて而して一が残ると云ふこと。三二六十二と云ふは。二を三で割れば六が立つて二か残ると云ふこと。それを九九の呼聲にして。三一三十一。三二六十二と早く分る様にしてある。そこで今も其通りて南無阿彌陀佛の名號につづめてあると得安い。よりに諸有の功德も善根も皆名號の六字

にちづめこまれたもの。もしも廣く云ふなれば一一に。大經を講釋せねばならぬ。大經を講釋したとて。なかく彌陀如來の功德が説き盡されることには無い。それをちづめて御名號として頂けは。南無とたのむ衆生を阿彌陀佛のたすけたまふ御いはれぞと。たやすく聽聞が出来る。安心決定鈔には。かるがゆへに念佛の行者。名號をきかば。あはやわが往生は成就しにけり。十方衆生往生成就せずば。正覺とらしとちかひたまひし。法藏菩薩の正覺の果名なるがゆへに「とおもふべし」と仰せられる。この名號が即ち法體大行にして。この大行より起りたる信。これが安樂佛國に生するの正因となるのである。

如來清淨本願の
本則三々の品なれど

無生の生なりければ
一一もかはることぞなき

これは此度我々のさとりを仰せられたものであつて。前章に無別道故と云ふて。往生の因の同じことを御明しなり。今首は因の同じ故に果も亦同じと云ふことを御示しなるのである。人には色々の差別ありて。學問のある人もあり。無き人もあり。善根功德をつみし人もあり。つまぬ人もありても。皆同一の因を以て同一の果を得ることである。氣車に乗るには。足の健き者も疲きも差別は無い。これが因平等。目が見えぬから行かれぬと云ふこともなく。達者なものであるから早く行かれると云ふことも無い。たゞ平等に蒸氣の力を以て行くより外は無い。そこで因平等なるが故に果も亦一なり。淨土に往生して皆同一のさとりを開くことである。これを本則三々の品なれど。一一もかはることぞなきと仰せられる。本則とは。本はすなはちと云ふこと。三々の品とは。上中下と分ち

て三品。それを又三つづゝに分ちて三々が九品とし。この九品より猶細かく分つなれば中々に多くなれども。大經には上中下の三輩を御説きなされ。觀經には九品を御説きなさるゝ。これが本則三々の品と仰せられるところである。本則三々の品とは。おかしき句調の様なれども。本則三三品とある御言葉に御依りなされたからのことである。御左訓に。もとはこのしなれゆゑやうの。ほうとにむまれぬれば。ひとりもかはることなるとなり」と遊ばされてある。其かはること無き果と云ふは何事であるかと云ふと。即ち無生の生のさとり。そくて既に往生と云ひかがら無生の生。生るゝことなきの生と云ふは何故かと云ふに。これは論註の上にも問答の出であることとて。それは生と云ふとがあれば。必ず滅と云ふとがある。これは一切方法の通して同事でも同じとてある。然るに天親菩薩は。彼の

國に生せんと願ふと仰せらるゝは譯の知らぬとぢや。全體生と云ふとがある故に滅があり。滅して又生すれば。生は。いろゝの生のはじめ。誠にうるさきものでありて。それが爲に生死を離るゝとをせねばならぬと云ふのである。然るに彼國に生れたいと云ふて。生れたらば又死すると云ふとがあるてあろう。生を捨てゝ生を求めば何ぞつさんやと問ふに。答へて。生と云ふとを。外の一應の生と同様に思ふから悪い。彌陀の淨土の生は無生の生ぢや。言葉を替へて云へは無滅の生と云ふて好い。生れて滅の無い生故に。生と云ふ名も無き位である。故に無滅の生と云ふても好きことであるが。それでは何様も言葉が可笑しい故に。これを無生の生と仰せられるのである。これを蓮如上人は分り易きように。淨土の生は。三界をめぐるがごとき生にあらず。されば無生の生と云ふなりと仰せられ

る。これを譬へて云ふなれば。年から年中の長旅をして居るものは宿ると云ふことがあれば。かならず出達と云ふことがある宿に止りて居る以上は晩かれ早かれ立つと云ふことは無ければならぬ。それが家に歸ると最早や立つと云ふことは無い。我身の家へ歸り着いたのである。それでも家に歸る時の有様は。矢張宿々に着くのと。別に變りたることも無い矢張同ト姿である。たゞ落着く先が旅宿であるか自家であるかの相違である。そこで淨土に往生するは。旅の宿屋に着くのでは無い。家に落着く様なもの。故に淨土に往生することを本國に歸るとも。家郷に歸るとも云ふのでありて借問す家郷何處に在る。極樂國中七寶臺。家に歸に安堵する如く。淨土に往生して無生の生を得る。このさとりを開くことが。本則三々の品なれど一二もかはることぞなき。因平等にして。皆同一の果を得ると御示

しなされるゝことである。

○無碍光如來の名號と

かの光明智相とは

無明長夜の闇を破し

衆生の志願をみてたまふ

これは出處は天親菩薩の淨土論でありて。淨土論の中に五念門を御明しになる。其五念門と云ふ中の第一番は禮拜。これは身体でする仕事。身を以て禮拜すること。次は讚嘆。これは口の仕事でありて。御名をとなへ讚嘆すること。即ち稱名の出處である。處がこの稱へるに就いて。たゞ口にとなへさへすれば好いと云ふのでは無いのでありて。もと天親菩薩は。阿彌陀如來を。歸命盡十方無碍光如來と御讚嘆なされて。其名の中に佛の光明の徳を顯して。盡十方無碍の光明である。十方を盡してさはるところなき御光明であると光明の徳をあらはしなされた。これが佛を讚嘆なされた名である。處でこ

の歸命盡十方無碍光如來と云ふことについて或る御聖教では天親菩薩は力を極めて讚嘆し玉ふたとも仰せられる是は數多の徳號の中で何と云ふて佛の御徳を讚したればよからうか。これでもいかぬ。これでもいかぬとて。盡十方無碍光と云ふ御光明を以て讚られたことである。而して其讚嘆門を御説明の處に。彼の佛の名を稱して。彼の如來の光明智相の如く。彼の名義の如く。實の如く修行し相應せんと欲ふか故に」と判せられてありて。意味を知りて。其意になう様で無ければならぬ。たゞ名を稱へたばかりではいかぬ。光明と名號との御いはれを知りて稱へるのでなければならぬ。その光明を助けられるのであることが知られねばならぬ。もしそうでないなれば不如實と云ふもの。彼の如來の光明知相の如く。實の如く修行し相應せねばならぬと御示しなされた。これを鸞師が御釋なされ。

今讚亦鸞師の御釋によりて御製作なされて。無碍光如來の名號と。彼の光明智相とはとあそはされたものである。そこで名と義は同様云ふことかと云ふと。光明と名號。この光明と名號とは如何云ふ御いはれがあるかと云ふと。無明長夜の闇を破し。衆生の志願をみてたまふと云ふの徳がある。無明の闇を破し。衆生の志願を満すと。この破闇満願と云ふことは。裏と表とでありて。又破闇は消極。満願は積極と云ふて好い。病を治すと云ふは消極。健に復ると云ふは積極。これと同トことである。次に闇は長夜の闇と仰せられて。無明を破せされば。何時までも闇である。故に無明長夜の闇と云ふ。又無明と云ふことに就いても。いろくくと別けて云ふことがあるが全体總と別のちがいがあある。一切の煩惱を無明と云ふ時もあるが又無明を別に談ずることもある。今分り易く云へば。貪慾と云ふこ

とも無明より起る。道理が分つて居りて。これは此様する筈ては無
いと思たならば貪慾も起らぬ。嗔恚も矢張無明てありて。無理は人
にあると思へば。無理なものは無理なもの。此方は此方て道を守れ
は好いと知るなれば。役にも立たぬことに血眼になつて腹を立てる
にも及ばぬ。愚痴はもとより無明。物にわきまへの付かぬとか。氣
が結はれるとか筋道の分らぬ。これは皆無明の所爲である。そこで
貪慾も。嗔恚も皆無明。無明煩惱しけくして。塵數のこどく遍滿す
とも仰せられるそくて無明長夜の闇。明るければ迷はぬが。暗き故
に迷ふ。無明長夜の闇ゆへに。迷に迷をかさねて何時が際限とも分
らぬ。處でこの無明の闇を破する處の光明は何様な光明かと云ふに
日輪の光の様でも無く。金銀を磨立てた様な光でも無い。この光明
は智慧のすがたである。故に光明は貪嗔痴慢にもさへられずと云ふ

て彌陀如來の智慧でありて。みちたる智慧で以て無明の闇を破る。
無碍の光明は無明の闇を破するの智日なりとも仰せられてある。そ
こで病氣が癒れば壯健となると同く。無明に束縛されぬ様になれ
ば。闇が破れて明るくなる。明るくなる處で志願を満足する。志願
を満足するとは往生のことになるのである。そこでこの破闇滿願の
ことは。光明の徳であることは分りておる。名號は何様したものか
と云ふと。これはこの光明の徳を頂かさせる爲に。阿彌陀如來は。
いろくくと工夫をしてこの名號を御成就なされたことである。全体
何事でも名と云ふことが無ければならぬので。世間の物の名は。も
とより淺はかなるものではあるが。それでさへ名をつけて置かねば分
らぬ。一寸云ふて見ると。彼の鐵道のことも。京都から向町に行
て。それから山崎に行て夫から何處其處て。そして大阪に行く鐵道

ちや等と云へば。なかく／＼やゝこしい。それを名前をつけて。京坂間鐵道と云ふと直に分る。たゞ云へば此様云ふ道をつけて。此様云ふ工合に鐵を敷いたものちやと云はずとも。鐵道と云ふ名をつけて云へば分り易い又娘の兒が三人あるとしても。それに名を付けて置かなんたならばなかく／＼粉こしい。脊の高い。色の黒いのちやとか色の白い顔の丸いのちやと云ふてもなかく／＼分り難い。そこでお梅とかお松とか名を付けておけば直に分る。其外何事も同トことで。世間の名ても皆いろ／＼の譯を縮込みて呼名をつけたもの。處て阿彌陀如來様の御徳の廣大なるに。もし名が付けて無かつたならば。なかく／＼其徳の。萬分の一も云ひ顯すことが出來ぬ。無量無邊の徳これをつめていたゝかねはならぬ。つゝめるには名をつけねばならぬ全体名の字は夕と云ふ字の下に口の字が書いてある晝の間は目

ぞ物が見える故にまた目で見て彼の此のと云ふことが出来るが。夜になると誰が何處に居るやら少しも分らぬ。それに名と云ふものがある。名を呼ぶと直に分る。よつて口で云ふて夕にでも分ると云ふが名の字のわけである。即ち見ゆるもせず聞ゆるもせぬものまで。名を呼びさへすれば分るのか名の字の義である。そこで阿彌陀如來の御徳もなかく／＼知れず。御光明も少しも分らぬが。これをつづめて分る様にして。名をつけて我々に頂かれる様にして下される。まことにありがたきことでありて。これを以光明名號。攝化十方と仰せられる。阿彌陀如來に名號がありても。何も無い空の名ならば仕方が無い。又光明がありても。名號が無ければ聞くことが出來ぬ。それを此光明名號ありて。我々が頂くことが出来るのは。まことに有がたいてでありて。五劫の御思惟も實にこれが爲である。御聖教にたも

ちやすき名號を成就したまふと云ふもこのことである。故にたゞ意義も分らずに稱へるばかりではいかぬ。彼の名義の如く。實の如く相應する處で。其廣大なる利益をいたゞくので。そこで天親菩薩も歸命盡十方無碍光如來と御讚嘆なされる。今我々もそれをうけついであらたふとや南無阿彌陀佛と稱へ奉ることである

不如實修行といへること

鸞師釋してのたまはく

一者信心あつからず

若存若亡するゆへに

これは下の御和讚と二首一緒に話せねばならぬのであるが。まづ一首づゝはなしかけます。さて前の御和讚にて御話と申したる如く。彼の佛の名を稱へ。彼の如來の光明智相の如く。彼の名義の如く。實の如く修行と相應すると云ふ。これが如實修行と云ふことで無碍光如來の名號と。かの光明智相とは無明長夜の闇を破り衆生の

志願をみてたまふ名義にかなふのでなければならぬ。それが不如實と云ふて。名義にかなはぬものゝことを茲に御明らなされるので。鸞師はこの不如實のことを。一には。二には。三にはと數へて仰せられて。今はその不の字の付く第一番の信心あつからずと云ふことを御示しなるのである。處てこゝか能く氣をつけねばならぬところで前の讚て口に稱へる讚嘆門の稱名のことかと思ふと直に信心のことになりて居るので。もしこゝろに無きことを云ふのならば。寐言を云ふも同トこと。如實の信がありてこそ。如實の讚嘆が出来る。若そうなければ。縱令何程稱名と何程憶念するとも。無明猶ありて所願を満足せずと仰せられて稱名と憶念しても役に立たぬ。それは何故かと云へば。不如實であるからである。今三不の中にあつからずと云ふひとつ。あつからずと云ふ反は。あつきと云ふ方であつきと

は淳じゆんの字。淳じゆんは淳朴じゆんぱくとつく字を。又淳厚またじゆんかうとつくきて。てあつき。すなはち輕薄けいぱくと云ふことの反對。「うすべら」など云ふ反對である。それが今淳いまじゆんからすと云ふのであるからうすべらな輕薄けいぱくな方である。輕薄けいぱくなものは表面ひやうめんを飾る。淳厚じゆんかうなものは外部うたを飾らぬ。外部うたを飾ると云ふ言葉は。己おのに内部うちの好よくないを顯あらはしてある。今世間せけんで萬事ばんじに付けて昔時むかしをたつとぶが。これは何故なぜかと云ふと。別わかのことでは無い。昔物むかしものは手厚てあつく念ねんが入いつてあるからのことである。品物しなもの等らでも昔むかしのものと今の物ものとは違ちがふて。今の物ものは多くは。上部うへばかりを飾りたてゝ。爲ための好よむ惡あむは少せうしも構かまはぬと云ふ様な有あり様さまである。依よつて品物しなものばかりでなく。第一だいいちに人の性質せいしやうが違ちがふておる。又昔またむかしと今いまとはかりて無く。同おなじく今日こんにちの事ことでも。木曾きその山中やまなかの人ひとでも引ひはり出して來きたならば。表面うへは上手じやうずも無なければ飾かざもなくむくつけな

きものであるなれども。其そのかはりに心こころは淳朴じゆんぱくとすなをてある。これに引ひかへて。京都きやうと等の人ひとは。表おもては中々ちやうちや工合あひあひが好よいが。心こころの中うちは決して油斷あぶらだんの出來きぬ様な人ひとが多い。これはたゞいろくの手厚てあつきものや。輕薄けいぱくなものがあると云ふことを御話ごわし申まうしたことであるが。今いま我々われわれが佛ぶつに對たいして。信心しんじんにも手厚てあつきと手厚てあつからさると。飾かざると飾かざらさるとの相違さういがあるのて。自力じりきの心こころか除かかずして。此こ様ようして彼方あらと。我わか機きさまをつくらふは。即すなはち飾かざるのでありて。これを不如ふじよ實じつと云ふ。それで無なくて。我わか機きの方は有ありのまゝにて。佛ぶつのたすくるぞよの御呼聲ごよびこゑを眞受まうけに受うけらるれば。それか如實にじじつと云ふもの。まことの信心しんじんと云ふは。我わか心こころを清きよらかにして掛からねばならぬと云ふのではない。我わが身みは現げんにこれ罪惡ざいあく生死しやうじの凡夫ぼんぷ。曠却くわうじやくよりこのかた。常つねに忍にんじ常つねに流轉りゆうてんして。出離しゅつりの緣縁あることなり。我わ身みは斯かる淺あさ

まじきものと打明けて。たゞ佛の願力に御まかせする。これが如實の信と云ふもの。それを出来もせぬことに飾りたい様なころが除かぬから。手厚くない輕薄な不如實と云ふことになる。世間のとても。兎ても助かるまいと云ふ位な病人は。容體もありのまゝに隠さずして云ふか。また其處までも行ぬ位な病人は。醫者にありのまゝに云はずして隠す様なことがあるが醫者に容體をかくす程馬鹿なことはない病氣になつたならば。縱令何様な病にもせよ。皆持ち出して療治を受けねはならぬ。又隠した處が醫者は知つて居る。又知らぬ様な醫者なれば役に立たぬ佛も同トことでありて。我等の罪惡を能く御存知の上にて起し玉へる本願故に。皆御存知のことゆへ。隠すにも飾るにも及ばぬと思ふて。有りのまゝに打ち出して。斯る淺ましきものまでもと。よろこびて御受け申すより外は無。これ

が「すなを」など云ふものである。如實不如實の分れ目も此處にあること故に。大事に心掛けねはならぬ。さて其信心あつからざるの模様はと云ふと。若存若亡とありて。御左訓に。アルトキハ。サモトオモフ。アルトキハ。カナフマシトオモフナリとありて。心の中に或時は往生も出来るてあろうと思はれたり。又或時は往生かなうまこと不安心になる。これが信心の濃厚からさるゝるしてあるぞよと御示しなされるゝこれは分り易いように御講釋なされたものであるが元この若存若亡と云ふとは。老子と云ふ物書にある語で。その語を鸞師が御用ひなされたので。老子に。上士は道を聞いてつとめてこれを御行ふ。下士は道を聞いて大にこれを笑ふ。中士は道を聞いて若存若亡とある。これが言葉の出處である。これを時間て云へは。時によりて笑ふたり。又時によりて如何にもと云ふ様にあるが。も一

つちづめて云ふと。或時は存と云ふ。その有るものも。上土が道を聞いて成程と思ふ様な心のあるのでなく。又其代りに。或時は亡と云ふ。その無きも。下土が道を聞いて笑ふ様なことも無いので。すなはち有るか無しかと云ふ分齊。若存と云ふ。有る時にたけでも上土の心の様にあるなれば。また少し價直があるが。あるかなしかと云ふ分齊ゆへに。若存と云ふ有る時とて。決してあると云ふ程なのではない。世間のことも。此中途半のあるかなしかの分齊のものが。何事に付けても多いものである。處てこゝに御いましめなるは稱名もし憶念もしても。も一つ他力の信になりておらぬから。不達者な輕薄な手薄い分齊である。この手薄い信ては無明を破つて所願を満足することは出来ぬぞよとの御示してある。

○二者信心一ならず 決定なきゆへなれば

三者信心相續せず 餘念間故とのべたまふ

前に三不中の一不たけは御話し申して置きまらたが三不と云ふ中の第二番目は信心一ならずと仰せられる。これが不如實修行と御示しなる中の二番目の不の字付である。そこで其一ならずと云ふは何故かと云ふと。決定が無ひ故にと云ふことになる。もとより決定と云ふことが無ければならぬので。御文章などにも。いはく信心決定してと仰せられて。信心と云へば必ず決定でなければならぬ。處てそれが不の字付の方故に一に決定しておらぬ。決定しておらぬ故に如實修行になられぬと云ふことである。處てこの決の字について。面白いことがある。決の字は三水偏に夫の字を書くので。易に夫は決なりとありて。さたまると云ふ字である。又積水を決するとか。河水決するとか云ふと。水の堤の切れてあふるゝことである。これ

は一方に切れてあふれ出る有様で。夫の字の意味のある處である。それが夫の字は夫の字の如く片方の無いのでなく。両方の有るのである。そこで水決々なさと云ふ時は。水の一はいに充滿ちたる姿である。それ故に水の事で云ふと。決と切れてあふれる大水なさは悪しきもので夫の字の方の切れぬ方が善いのであるか。これを人間のことに持つて来ると夫のほうがよくて。夫の字の方がわるい。心快々なさ云ふと。心のふさいで面白くなきことである。それが夫の字の方で。片方の無い夫の字を下のつけると快の字となりて。愉快の快の字。こゝろよいと云ふ字になる。丁度。快の字の面白くない反對のことになるのである。そこで心か一方に決して。こゝろが定るから。おのづから愉快をおほゆる様になる。世間で思切りの好いと云ふが。思切りの好いと云ふは。ぐづぐづとこたこと無いのでぐ

づぐとせず心を決するから。自然萬事について愉快にあると云ふ様なものである。そこで今もこれと同じことで。信心が一にさたまらぬと云へば。中ぶらりな信心でありて。これなれば佛のおたすけにあづかるであらふか。これではかなふまいかとおもい。これこそと思はれたり。又おもはれぬこれが一にさたまらぬからのことである。まことの信心は其様なさたまらぬと云ふ様なことは無い。信心さたまりぬればとも。信心決定してとも仰せられて確かとさたまるのである。處て不の字つきの方故にさたまらぬ。さたまらぬ故に一ならぬと云ふことである。世間の人々の中には。死ぬることとか。未來のこととか云ふと。もう止めて貰ひたい。心ほそくておもしろくないと云ふが。これが行先もさたまらず。何様なることか分らぬからである。若さたまりて分りておりて。死なば浄土に往

生じなんと思ふならば。死と聞き未來と聞くに ついても。我が身の上をよろこぶ様になる。これが信決定の徳。又怏々と面白くなき反對で。愉々怏々と樂しき方である次に三番目の不の字付は。信心相續せずとありて。前のは両方にまたがりて。さたまたぬの。これはまた相續せずと續かぬのでありて。昨日と今日とは思がちがひ。今日と明日とは信心かちかふと云ふ様なのである。處でこの相續と云ふ字も面白い字でありて世間でも。家督相續を々と云ふが。この相續の語も佛書から出て來たものと思ふ。なぜと云ふと相續と云ふ語は儒書よりは佛書の方に多くある。それは先づ何様でもよいが。この相續と云ふは。過去。現在。未來と相續し。昨日。今日。明日と相續するので。譬へて見れば蠟燭の火もランプの火も皆相續するから點燈りておるので。若これかピカリくと切れくに光るならば

燈はともりておらぬ。不斷に相續するところを明るく光りて物を見るによろしい。線香の火も同トことで。端から端まで火が相續して行くからともりておりて滅へぬのである。これと同トことで。昨日と今日と別。今日と明日と別。昨日はよかつたが。今日はよくないと云ふ様ではいかぬ昨日も。今日も。今年も。來年もと相續してゆくのでなければならぬ。處でそれが不の字付の方故に相續が出来ぬ。何故相續が出来ぬのかと云ふと。餘念まとはるが故に。この餘念間故の間の字はまとはると訓んでも。へたつと訓んでもよき字でありて。間は間に物のはいること。間尺で一問二問と云ふ時も。一問二問と間を分けて云ふこと。即ちへたつたりのことである。又離間など云ふて。人と人との中を惡ふさそうと思ふと。彼方の人の處へゆきては。甲の某は貴氏のことを惡ふ云ひました。いや期様云ふこと

を爲ておりましたと悪口を云ひ。又一方にゆきて。乙の某は貴氏を
 除物に爲ようと掛つております。其證據は斯様云ふことがあると悪
 口を云ふ。其様すると。お互に面白く無き氣になつて。終には申の
 好かつたものが悪しくなる。これが離間とへたてるのである。今も
 餘念まどはると云ふて。自力たの雜行たの雜修たのと云ふ様な。つ
 まらぬものが間はりて來ると。佛に對して信心が相續せぬてになる
 昨日は助けられるのか知らんと思ふておりたが。今日は亦兎ても助
 かるまいかと思ふ。斯る餘念の間はる有様ゆへ。眞の信心をえたる
 ものゝ何時思ひ出して。往生一定御助け治定とよろこぶに引かへ
 て。いつもく信心が相續せぬ。何故かと云へば餘念まどはるが故
 に。これが第三番目の不の字付である。處で前回にお話し申せしと
 合せて三の不の字付の不如實と云ふ方のことを御話し申しましたるが

このまきれものに非ざる眞實の信心と云ふは何様であるかと云ふと
 すなはち一心でありて。まきれものを離れたる信心ひとつである。
 然るに三の不の字付の信心があると云ふと。眞の信心の方も三あり
 そうなものと思ふ様な人もある。これを譬へて云ふて見ると紙幣な
 さいにも贋札があるが。眞の紙幣と贋の紙幣と何様違ふかと云ふと。
 或は紙が悪ふて薄いか。或は摸様にきまりが無ふて見苦しいとか。
 或は印刷の工合が悪ふてはつきりせぬとか。いろいろの違目がある。
 眞止のものは何様かと云ふと何もかも當前でよい。そんならはと云
 ふて眞正の方に。紙の好いの摸様の好いの。印刷の好いのと三に分
 れておるかど云ふと。決してそうではない。眞正のものと云ふはひ
 とつ。ひとつてありて紙も好く摸様も好く印刷も好いのである。故
 に信心も決して三種に起ると云ふのでは無い。たた一の信心。今は不

の字の付く方に三あると云ふことを御示しなされたのである

三信展轉相成す

行者こゝろをとゞむべし

信心あつからざるゆへに

決定の信なかりけり」

決定の信なきゆへに

念相續せざるなり

念相續せざるゆへ

決定の信をえざるなり」

決定の信をえざるゆへ

信心不淳とのへたまふ

如實修行相應は

信心ひとつにさためたり」

さて前回から申したるごとく三不別々のようであるが。この三不が

クルく廻りに廻りて。三巴の様にクルリくと廻りて。展轉相成

と相生する。のびてまはりて相成トてゆくののであるゆへ。行者よく

くこゝろをとゞめねばならぬぞよと仰せられたのである。處でそ

のくるくまはりに廻る中に。順轉と逆轉とがありて。信心あつか

らざるゆへに。決定の信なかりけり。決定の信なきゆへに念相續せ

ざるなり」と云ふまでは順轉。念相續せざるゆへ。決定の信をえざ

るなり。決定の信をえざるゆへ。信心不淳とのべたまふと云ふが逆

轉である。そこで何様云ふ工合に展轉相成するかと云ふに。信心が

あつからぬゆへに決定の信をえぬ。淳さと云ふは。淳朴に淳厚なる

こと。その反對で輕薄なウスベラな若存若亡のこゝろ故に信心が

一にさたまり決定することが出来ぬ又決定の信なきゆへに念相續せ

ざるなりと。一ならず。決定なき位ゆへに相續せぬ。全体決定して

さたまりたることなれば相續するのでいよく斯様と決着したること

なれば必ず相續する。それが相續せぬと云へば。さたまりておらぬ

であると云はねはならぬ。世間で日和のこゝろを云ふが。此頃は好

さたまつた日和ちやと云へば日和のつゞくこと。又此頃はさつぱり

きまらぬ天氣ぢやと云へば。降つたり照つたり續かぬ日和である。
 故に信心が決定すれば必ず相續する。さたまらぬゆへに相續が出来ぬと云ふ。これが順轉と。一不より二不へ。二不より三不へと轉じて來るのである。又逆轉と云ふ方は何様かと云ふに。昨日も今日もと相續してゆく位なればさたまるのであるが。それが餘念の間相續してゆかぬころ故に決定することが出来ぬ。これが三から二にかへる。又決定して一にさたまりたる信心なれば。すなはち「てあついで」淳心であるなれども。不の字付の方で。決定の無き心故に。若存若亡の境界でありて信心不淳である。これが二より一にかへるところである。故に何様して見てもくるりくと廻りて。不の字付は矢張不の字付に廻りてゆく。然れば不の字を除けた如實修行と云ふ方は何様であるかと云ふと水を見ること水の如く。火を見ること

火の如く。熱さを知ること熱さが如く。冷かきを知ること冷かきか如く。實の如く其まゝと云ふことで。熱き茶であるけれども冷いと感得て見ようかと云ふこと出来ずこれは冷たい水であるけれども熱いと思ふて見よと云ふことも出来ぬ。これが實の如くと云ふことである。處て病氣で熱なまてもあると。煖きものが煖くなかつたり。甘きものが甘くなかつたりする。これと同じく。自力と云ふ病がある。信得らるべきことが信得られなったり。決定出来べきことが出来なったりする。そこで自力と云ふ病さへ無いならば光明名號のおいはれ。光明名號の徳の如く信得られ。水を知ること水の如く。火を知ること火の如く。佛の光明を知ること佛の光明の如くなる。これで又厚き故に一心。一心故に相續する。相續心故に決定心決定心故に淳心と云ふ様に順轉逆轉。展轉相成する。すなはち。如實の

方は如實の方へ相成し。不の字の方は不の方に展轉することである。そくて行者よくくこゝろをとめて如實の信者にならねばならぬと云ふことである先はこれにて。

○されば人間のはかなきことは老少不定のさかひなればたれの人もはやく後生の一大事をこゝろにかけて阿彌陀佛をふかくたのみまいらせて念佛まふすべきものなり(讚題)

今日は申すまでも無く。過日遷化せられし見敬院針水和尙の追吊の法筵である。まことに和尙の功德のことに就いては。すでに諸君が親しく見聞せられてあること故に。今更にこれを詳く云ふには及ばぬことであるが。まづ近年のことを申しても。老體を以て重き侍眞の役をつとめ。上は大法主殿の顧問となり。下は僧俗の教諭をねんごろにして。大に我宗の御爲となられたることである。然るに無常

の世の有様。一度は追々に宜敷き方と聞いたが。とうとう薬石も功を奏せずして遷化せられて仕舞ふた。それに就いては。有縁の善知識は深く御心を痛めさせられ葬儀のことも。彼の通に悉皆本山に於いて行はせられ。まことに非常に盛なることであつた。盛んであつたと云ふに就いても。人が多く集りて賑やかであつたと云ふでは無く。多くの人の集りて葬送するに付いても。ますます和尙の徳を思ひ。懷舊の涙のこぼるゝてであつた。そこで葬儀其外諸般のことは皆本山に於て鄭重に行はせられたが。今日は其社中の人々等が斯く追吊の佛事を行ふとのことである。私も和尙には深き恩ありて。和尙と私の師匠とは實に兄弟の如き中でありたので。近く一寸申して見ると叔父さんに當ると云ふ様な工合である。それ故に今日かく私がお話し申すも深き因縁のあることと思ひます。

さて一同に誰も心得ねばならぬが無常のことでありて。この無常と云ふことは。誰一人として免るゝことは出来ぬ。上は大聖世尊より下は悪逆の提婆にいたるまで。のかれがたきは無常なり」でありて釋迦如來さまも無常の有様に御従ひなされ。提婆の極悪も無常に打勝つことは出来ぬ。まして我々の境界無常を免るゝものは。一人として有ろう道理が無いこれを年で云へば老少不定。皆目に見。耳に聞きて居る通り。年寄り弱きものはかりが死ぬでなく。年少く強きものも死ぬ。然るにこれを人の身の上のことと思ひて。我身の上のこと思はぬ。無常のことは見も聞きもしながら我が身の無常を知らぬ。而して此事に氣が付かぬならば。何程佛法を聽聞しても何の役にも立たぬ。元釋迦如來さまの御修行に御かゝりなされたのも。矢張無常と云ふことから起りたのでありて。大經には。見老病死。

悟世非常。棄國財位。入山學道とありて。この非常とはすなはち無

常のこと。無常とは生死のこと生死の境界故に無常なり。無常の境界故に生死を免るゝことは出来ぬその生死と云ふは略にして。詳しく云へば。生老病死。丁度歳に四季ありて春夏秋冬と遷變るごとく生あれば必老病死と云ふことが附添ふて來る。故に生と云ふことは結構なに相違は無いが。これが生はかりで濟むて無く。老病死の附添ふた生である故に。これを常住と云ふことは出来ぬ即ち非常である。無常である。世には五十六十にならねば老と云はれぬ様に思ふ人もあるが。老とは年をかさねることである故に。二十でも三十でも。年をかさね老ひて行くのである。人は小さき時分には。月日の立つのを喜ぶことで。大きくなつた。早何歳になつたと云ふて居るが。そもくこれか年の重ねはトめ。老ひはトめである。次に病も

誰にも有ること。もとより多少輕重の差は有るが。この四大假和合の肉體を持つた以上は。病の無いものは一人も無い而して仕舞は何様かと云ふと。晩かれ早かれ死と云ふことに歸して仕舞ふ。これが即ち無常のありさまである。處でこの無常のことは云はずとも分りて居ると皆人は云ふで有ろう。分りて居るなれば何故に驚き立てぬか。目で見耳で聞きて。無常と云ふことは能く知りておりても無常を離れて常住を求むると云ふことに氣が付かぬなれば知らぬも同トことである。それがたゞ人の身の上のみに無常がある様な氣になりて。ウカ／＼として居るなら。又しても生死。またしても生死。終に生死を離るゝこと出來ず。御和讚の生死の苦海ほとりなし。ひさしくしつめるわれらをば」とのたまふ如く。無常と知りつゝ。これを離るゝ道を求めぬ故に。いつもく生死の海に沈淪して出づる

時もない。然るに佛は。老病死を見て世の非常を悟ると。これではならぬと思召し。國を棄て位を捨てゝ。山に入りて。修行なされ。終に成道なされたことである故に今日の我々も。これにならひて。まつ無常と云ふことに驚きを立て生死を離るゝの道を求める様にせぬばならぬ。生死の方から云ふと出離生死。それを一方より云へば涅槃常住に入るのである。御和讚にも。源空三五のよはひにて。無常のことはりさとつゝ。厭離の素懷をあらはして。菩提のみちにぞいらしめし」とありて。涅槃常住を求むるに就いて生死を出離し出離生死と棄つることがあるから涅槃求むる様になる。處でその出離生死の道に就いても我等に相應せぬ法は是非も無いが。時機相應の妙法があると聞けば。いそぎてこれを求めぬばならぬ。讚題の文は何時も無常について聽聞する御文章であるが。この白骨の御文章

目は少し悪くても。字が大きければ讀める。然るに目は悪く文字は小さいのであるから讀むことが出来ぬ今聖道の法は。理深く解微なりと云ふて。なか／＼六か／＼き道理でありて分り難い。其上に根機か最劣て。淺まらさ凡夫のことであるから兎ても企て及ふべきは無。故に末世の衆生の。聖道の修行をなすとも。一人も證り得るものなきことを示す。唯有淨土一門可通入路。たゞ淨土門ひとつより外には無いと教へ玉ふことである。さて其の淨土門の中に就いても。正雜の差別があるが。御正意は。たゞ阿彌陀如來をたのみ奉るはかり。たのむと云ふか信心のこと。この信心ひとつか涅槃の眞因これか生死を離るゝの道である。或時蓮如上人は。五濁惡世のわれらこそ金剛の信心はかりにて。なか／＼生死をすてはて。自然の淨土にいたるなれ。金剛堅固の信心の。さてまるときをまらゑてぞ。

彌陀の心光攝護して。なか／＼生死をへたてける」と二首の和讃を引きて。あらおもゆるや／＼と仰せられた。何故にあらおもゆるやと仰せらるゝかと云ふと。この生死を離れて涅槃に入る程の大事か。たゞ彌陀をたのむ金剛の信心はかりてよいとは。さても／＼不思議の誓願あらおもゆるやと仰せられるのである。金剛堅固の信心とは御讚題の阿彌陀如來をふかくたのみまいらせると仰せられる。たのむ一念のこと。このたのむ一念のところに往生の眞因成就する三首御詠歌の二首目に「つみふかく如來をたのむ身になれは。のりのちからに西へこそゆけ」と仰せられるも同じこととありて。なか／＼生死をすてはて。自然の淨土にいたるなりと仰せられる。さて又金剛堅固の信心の。さてまるときをまらゑてぞ。彌陀の心光攝護してと仰せられる。彌陀の心光の攝護する時がすなはち金剛の信心のさ

たまる時。その信心のきたまる時をまちゑてぞ彌陀の心光攝護して
 なかく生死をへたてける。故にこの生死をへたて。浄土にいたること。
 皆佛智他力の御蔭にて。決して我か力ては無い。御文章には。
 この信ずるころも念ずるころも。彌陀如來の御方便より起さし
 むるものなりとおもふべし。又これしからなから。彌陀如來の御方
 よりさつけまじくたる信心とはやかてあらはにいられたりとも仰
 せられて。往生の一段に於いては。少しも我か力の間にあふことは
 無い。そこで間違へて我身の方をたのみにするると大失敗か出来る。
 我か手本をたのますして。阿彌陀如來をたのみまいらせるこれか他
 力の信心。元阿彌陀如來は何様云ふみほとけてあるかと云ふと。光
 壽無量の御さととりてありて。あまねきか光明無量かはらぬか壽命無
 量このあまねくかはらぬ佛の慈悲を。そのまゝ頂くのてあるから威

徳廣大の信心。これを御和讃には信心すなはち一心なり。一心すな
 はち金剛心。金剛心は菩提心とありて。菩提心であると仰せられる
 又佛の光壽のそのまゝを御廻向故に。このころ廣大にして邊際な
 ことも仰せられる。これかすなはち佛因。この佛因か何處てあらは
 るゝかと云ふと。臨終の時。浄土に往生して。光明無量壽命無量の
 彌陀同體のさととりとあらはれる。處てこの廣大のさととりを得るに。
 自の力の間問ふ筈は無い。我か機によらあらを顧す。ひたすら
 に彌陀をたのむ。これか金剛の信心はかりてある。そこで讚文に阿
 彌陀如來をふかくたのみまいらせてと仰せられたは分つたが。信心
 はかりてと仰せられるは外に何も入らぬであるものに。其下の御言
 葉に念佛申すべきものなりと仰せられたは何様したものかと思ふ人
 もある。この御文章の上では。報謝の爲とも何とも肩書が無いけれ

ごも信の上の稱名を。自身往生の爲と思ふべからずとは。極り切つたる御示してありて。信心の外には何も無い。たゞ信心のまゝが。報謝の稱名とあらはれるのでありて。往生の眞因と云ふは信心ひとつである故に壽命短かくして。一口の稱名をも得稱へずして死するものも往生する。もとより稱へて定るのは無い。たのむときに定るのである。しかして命がのびれば。この信臨終までとをりてありて。相續して行くから。彌陀をたのむと云ふことか。ありかたや南無阿彌陀佛と報謝の稱名にあらはれる。これは信心決定して。信後の稱名である。處てそれか。彌陀のたのまれぬ人にして見ると。往生は信の一念にさたまると云ふことか分らぬから。たゞ口になへさへすればよいと云ふ様なことに思ふ。これは大なる間違である。彌陀をたのむひとは。たのまるとまゝが顯れて。報謝の稱名となる

のである。「うれしさをむかははそでにつゝみけり。こよひは身にもあまりぬるかな」うれしさをむかははそでにつゝむといへることろは。むかはは雜行正行の分別もなく。念佛たにも申せは。往生するとはかりおもひつることろなり。こよひは身にもあまるといへるは正雜の分別をきゝわけ。一向一心になりて。信心決定のうへに。佛恩報盡のために念佛まふすこゝろは各別なり」とありて佛恩報盡のために念佛まふすこゝろはおほきに各別なり」とありて信心決定のうへに。佛恩報盡のために念佛まふすこゝろはおほきに名別なり。これか眞宗の稱名であると仰せられる。もとより出離も他力。涅槃も他力。他力によりて助けられるに。稱名が自力でありそうな筈は無い。さればたのみまいらせて念佛まふすへきものなりと仰せられて。肩書は無けれども。信後報恩の稱名であると云ふことは明に知られる。そくて上來申せし通り。白骨の御文章。無常の

ことを御示しになり。されはと言葉をあらためて。後生をこゝろに
かけ。彌陀をたのみて往生の眞因を決得し。其上報謝の稱名をとな
へよと三箇條を御教示ありたことである。これが當流の肝要である
云云

○信明院殿御正忌説教

(總會所に於て御裁斷
御書披露後説教あり)

各いかが心得られ候や。上に示す如く。たのむといふは。他力の信
心を。やすく知しめたまふ教示なるがゆへに。たすけたまへといふ
は。たゞこれ大悲の勅命に。信順するこゝろなり。(讚題)
さて今日より明日御日中まで。前々住上人信明院殿の。御正忌を御
營あらせらるゝことであるが。前々住上人の御正忌御正當は。一月
八日に當らせらるゝなれども。御七晝夜前のことゆへ。御引上げに
て。今月御修行あらせらるゝことである。就ては唯今拜聽せらるゝ

如く。御裁斷の御書を。御披露あらせられたることである。唯今聽
聞の通り。御安心御裁斷あそばされたることは。文化三年十一月と
あれは。八十餘年の己前のことにして。老年の人々は。其有様を聞
及んで。居らるゝ人もあろふか。前々住上人は安心惑亂に付て。一
方ならぬ御苦慮あそばされ。一流安心の正意を。御裁斷遊はし下さ
れたゆへ。今日御門葉の我々。明に他力安心の御正意を。聽聞させ
て頂くことである。御和讃に智恵光のちからより。本師源空あらは
れて。浄土眞宗をひらきつゝ。選擇本願のべたまふ。善導源信すゝ
むとも。本師源空ひろめずは。片州濁世のともがらは。いかてか眞
宗をさとりまじ。曠劫多生のあひたにも。出離の強縁しらざりき。
本師源空いまさずは。このたびむなしくすぎなまじ」と。是の如く
師を重トたまふは。法の廣大なることを。喜びたまふにある。今日

の我々。他力本願の御正意を聽聞させて頂くこと。全く前々住上人の御恩德にてあれば。御開山さまの師匠を重んぜさせらるゝ如く。尊敬し奉り。他力の安心を得て。御恩の廣大なることを。尊み喜びたてまつらて叶はぬことである。今前々住上人の御苦慮なご下されたは。眞宗一流の肝要。たのむ一念の事にてあるゆへ。事に大小あり。業に緩急あり。今示すところは。一流の肝要。我人出離生死の一大事なれば。これより急ぐべきはなく。これより重きはあらざるべしと。仰せられたり。其安心につきて。誤りの。出来たといふは。云何なるあやまりぞなれば。たすけたまへと。たのむと云に付て。種々の誤りが生じたるなり。そこでこの御裁斷の御書に於て。肝要なる處は。各々いかゞ心得られ候ふや。上に示すごとく。たのむといふは。他力の信心を。易く知らめたまふ。教示なるがゆへに

たすけたまへといふは。たゞこれ大悲の勅命に。信順すること。ろなりとのたまふところであります。初に抑當流安心の一義といふは。聞其名號信心歡喜乃至一念をもて。他力安心の依憑とするなりとありて。第十八願成就の御文の。聞其名號信心歡喜が。すなはちたすけたまへの安心であるとの仰せである。この名號を聞くばかりといふことを。さしよせて。雜行雜修自力をすて。たすけたまへとたのめと。教へたまふが。當流の安心なるが故に。中興上人は。ことにあひかはりて。すぐれたるいはれあるがゆへにと。仰せらるゝ。そのかはりはどこにあるかといふに。もと成就の文の聞其名號と云六字名號の由れを聞くことを。さしよせてたすけたまへと仰せられたることゆへ。我が方より思ひを運んでたすけたまへと。思ふことにはあらず。他流にはたすけたまへと云は。身命を佛陀の境に歸

してたすけ玉へと思を運ぶ世間で物を願ふ如く佛に願心を運ぶより
 取誤りて。彌陀をたのむを自力の運び心とする今は上に示す如くと
 聞其名號の御由を易く知しめたまふ。たすけたまへなるゆへに。更
 に我心を運ぶにあらす。たゞ大悲の勅命に。信順と。順ふばかりで
 ある。信心の信の字に。たのむの訓ありて信するといふ由れをたの
 むと知せたまふのである。そこでさらに凡夫不成の迷情を。思ひか
 たむる一念をいふにあらすとのたまふ。たのむと云ふを願ふことと
 誤るゆへに。願ふことではない。不成の迷情を。思ひかたむるにあ
 らす。信ずることを。易く知しめたまひて。たすけたまへとたのめ
 とのたまふ。信と。たのむがひとつなれば。たすけたまへといふは。
 たゞこれ大悲の勅命に。信順することゝなりとのたまふ。大悲の勅
 命に信順するとは。二河白道の喩へに。西岸上に人ありて喚で曰。

汝一心正念にして。直に來れ。我よく汝を護らんと。喚びたまひ。
 東の岸より仁者其道を尋ねて往け。必死の難なからんとのたまふ。
 それを承て。今二尊の勅命に信順して。水火の二河を顧りみずとあ
 る。是によりてたすけたまへと云は。たゞこれ大悲の勅命に。信順
 することゝなりとのたまふ。信といふも。自力の信にあらす。他力
 回向の信心にして。曇鸞大師は。淳心一心相續心といふ。三心を御
 明なされて。阿彌陀如來の御まことのありたけを。頂ひた信心故に
 淳心といはれ。佛願攝取の他力に。疑ひはれた信心故に。更に餘の
 方へことゝろをふらす。そこを一心といふ。一度決定攝取の御謂を領
 受納得した信心ゆへに。更に餘念の間はることなく。この信臨終ま
 までとほりて往生するゆへに。相續心といふ。このとほり。三の徳の
 備はりた信心ゆへに。機の方に於て。はこびことゝろは。更になきゆ

へに。この信心のことを。易く知らしめたまふ教示ゆへに。たすけたまへといふは。たゞこれ大悲の勅命に信順と。したがつはかりであるぞとの御教化である。たすけたまへといふに付て。このことは本と歸命といふを。和訓してたすけたまへといふ。此歸命と云に付て。自力の歸命と。他力の歸命とありて。自力の歸命をいへば。救我度我と云て。我を救ひたまへ我を濟度ひたまへと。我がころを避んで。たのむを。自力の歸命といふ。他力の歸命といふは。攝取不捨の大悲を以て。助けるぞよの勅命に。たゞ順ふばかりなり。これをたのむと云ことなるゆへ。たすけたまへとは。たゞこれ大悲の勅命に。信順することろとのたまふ。然れば。信心にも自力あり。他力あり。歸命にも。自力あり。他力あり。當流のは。他力の安心なるがゆへに。たゞこれ大悲の勅命に。信順することろなりと仰せ

らるゝのである。何故に自力。他力となるぞと云に。善導大師の六字釋に。南無と言ふは。歸命亦是發願回向之義とある。歸命は日本語でいへば。たすけたまへなり。その助けたまへが。亦是發願回向の義とあれば。發願回向とは。願をおこして。善根を回向と。さしむけてゆくことなれば。即ち我が方より運ぶ。たすけたまへなりと取成すが。自力の歸命なり。然るに高祖大師は發願回向を御釋なされて。發願回向とは。如來已に發願して。衆生の行を。回施したまふ意なりと仰せらるゝ。阿彌陀如來より發願して。我々が行を施し下さるゝことなれば。こちらから運ぶにあらず。たゞ信順するばかりである。信順するとは。我々が手許に助かる縁手が、りなく。穢惡汚染にして。清淨の心なく虚假譎偽にして。眞實の心もなく。清淨の信業もなく。法爾として。眞實の信業もなしと。仰せられて。

更に佛けになるべき。心なき故に。彌阿陀如来の方に。佛けになるべき。因も。果も。御成就なされて。衆生に與へて佛けにせんと喚て下さるゆへ。こちらの方は。たゞ順ふことなり。故に眞實報土の正因を。二尊のみことにたまはりてども。又佛の方より。さつけたまふ信心とも。仰せらるるのである。依て餘門餘流の。たすけたまへとは違ふことである。そこでたすけまへとは。一念の願心を思ひかたむるにあらすと。御教化あらせらるるのである。今日の代となりては。よもや。たのむ一念に付て。かゝる取誤をするひともあるまどきなれども。其當時にありては。歴々の學者達が。取惑をなして。諸國の御門葉。安心の惑亂をいたし。前々住上人へ御心痛をかけ奉り。かたの如く御裁斷なし置き下され。他力の御正意を。明に聽聞したてまつる。身の上と成り得たれば。今日御正忌に。遇ひ

奉りた所詮には。彌々大切の思に住し。御正意の安心を聽聞し。往生安堵の身の上とならねばならぬ。自ら惑ふと知て。惑ふものはあらト。惑ふは惑ひを知らざるゆへなりと仰せらるゝ。佛の方より給はる。他力回向を取り惑ふて。こちらより運びこゝろで。彌陀をたのむと。誤まるゆへに。心の思ひも。身の行ひも。皆我が往生の爲にのみ働ひて。報恩謝徳の行ひといふは。更になきやうになる。他力の信心を決得してたのむ。一念の時。往生一定の身となり。其上の心のむけやう。身の行ひ。悉く御恩報謝の經營のみにて。日暮をなし。信心の得益として轉惡成善の身の上となり。世間の人道。王法の道までも。自ら美しく相守る身となり。世出世の二道とも。心得違のなき。御門徒とならるゝこそ。今日御正忌に逢奉りたる。所詮と申すものである。

○命濁中天刹那にて

背正歸邪まさるゆゑ

横にあたをぞおこしける
依正二報滅亡し

上の數萬歳の有情も等の御和讃より。次第の如くに五濁を御明しなされたのである。數萬歳の有情も等とは劫濁。其の次の和讃が衆生濁。其次が煩惱濁。其次が見濁。此れ迄は已に御話と致した。今席は其次の命濁中天刹那にて等の御和讃で。之れは命濁を御明しなされた御和讃である命濁とは。命の短くなることで。人壽八萬歳の時もありたが。釋迦如來の御出世の時分は。人壽百歳。夫れが段々滅して。蓮如上人の御時分には。御文章にも仰せられた通り。人間の定命は五十六歳となりて。追々に短くなりて終には定命十歳となる。此の如く短くなる計りてなく。其上に命がもろい。命がもろいと云ふは定命迄生き延びず。中天と云ふて若死をし。中折をする。

佛の御教は算術より出たてなければども。今日生命保險等行はれて。其調査から見ると。平均三十七歳の人壽と云ふことである。今日ては平均五十歳迄行かず。中折をするか多い。之れが中天である。那刹とは。至極短いこと。今生れて直ぐ死する如き。時の極短さを云ふことである。依正二報とは。正報とは。命ある間は持つ。死すれば戻さず處の人間の身體のことをいふ。依報とは。依り處のこと。て世界を云ふことである。之れに就て。小の三災。大の三災と云ふが有りて。小の三災とは。飢饉戰爭病氣なり。大の三災とは風災火災水災を云ふ。此の三災に依りて世界も從て滅亡し。夫れから又増劫と云ふて。世界が出来る方向に向ふ。殆ど波の高低がある様なものがある。其世界の住人も命短く。其住處も此三災を免れられぬが。之れ五濁の有様である。背正とは。正法に背くといふこと。歸邪とは

邪道に歸依することをいふ。今此の命濁の處て。背正歸邪と云ふことを仰せられたは。之れは因と果とにて善導大師の法事讚に命濁中天刹那間依正二報同時滅背正歸邪橫起怨とある。正法に背き。邪道に歸すると。生類を害する。日本にもありたが。支那などでは。犠牲即ちいけにいと云ふて。神を祭るに生類の命を取りて供物にする甚たしきは人身御供と云ふて。人類の命を取る様になる。今日では人類を犠牲にすると云ふことはないが。獸類などを犠牲にすること。支那などには。今なほある。我が北海道の熊祭と云ふも同トことである。佛教では他の生命を取りて。己れの長命を祈り。幸福を願ふと云ふは。道理に背きたること。生命を取りて神を祭る時には。有情互に損害する。夫れが甚しくなると。人の命を殺してと云ふ様になる。如此く互に損害するは。之れ長命の爲に非ずして

短壽の因となる。我身をつめりて人の傷を知るといふ諺の如く。己れの生命の大切なるより。延て仁を禽獸にまで及ぼし。有情は相害ざる様にするのである佛教の上で精進をするは。仁を禽獸に及ぼして見れば。其肉を喰ふに忍びざるより起るものである。扱今私は。肉を禁せよとまでは云はぬが。滋養の爲め。或は衛生の爲め。又は病氣の爲めに喰ふは致し方もないが。唯た肉を喰ふにも。過せば却つて病の本となる故に。程々に致し度いと願ふばかりである。肉食せざれば。身體を弱して衛生に害あると申せども。近頃西洋にも蔬食會と云ふがありて禁肉を主張する會がある。傳教弘法等の祖師は禁肉の御方でありたが。能く山を開き。又よく長壽せられた。爾れば。強ち肉食せざれば。身體の強壯長壽を保たれぬとは云はれぬ又或人は鳥獸等は。人の餌食になる爲に。天の與ふる處と申せども

人間が鳥や魚を喰ふから。鳥や魚は人間の餌食になる爲め生れたものごとやと云へば。人間は虎狼の爲めに喰はるゝから。虎狼の餌食に人間が生れたと云はねばならぬ。之れ甚だ道理に背いたことで。一切の生類皆各々業因に引かれて生れたもので。一切有情其生命を大切にせぬものはない。依て有情に叩に害を加へぬ様にせぬばならぬことである。

儒道にても亦同トことで。かの孟子にある如く。齊の宣王堂上に座したまひ牛を牽て堂下を過ぐるを見て。牛何くに行くと尋ねられしに。將に鐘に響らんとすと答をらした。乃て王の云はるゝには。之を舎け。とて羊を以て牛に易られた。乃で孟子が之を「からかふ」て小の羊を以て大の牛に易るとはきたない。王が云はるゝには。齊の國褊小なりと雖も吾れ何んぞ。一牛を愛まんといはれたれば。孟子

の曰く牛を見て羊を見ざる故に。羊を以て牛に易へるか。若し羊を見て牛を見ざる時は牛を以て之に易へるであらうこれ牛を愛するは萬生類を愛する基。此心を擴充める時は。即ちこれ仁の術なり等」とこれ人を愛して禽獸に及はすので。西洋にては牛馬などを苦役せぬ會が出来ているも亦同ト道理である。正法に背き邪道に歸するとき。生類相害して生命を損することになる故に。命濁の處に背正歸邪との玉ふ。

さて前刻話の間たに。ふと感トたことを御話したとまへやう。凡て人情は。ゆがんだ方には向ひ易いものにて。佛法の中においても變なことで又利益のきゝめのことなどを云ふ。人が此の方にかた向き。心をもこらす。當り前の正しきことには。一向かた向きが少ない。此節大和の天理教の教祖の十年祭とかで。其賑ひ非常な

ことでありたと云ふ。大體此教は道理に契はぬ教で。天輪王が。後に天理と本尊の名さへ易る様な教にて。又かの十柱の神の中には。帝釋天あり。之れは佛教中のことで。神やら佛やら道理の分らぬことである。又其の目的とする處は未來のことに非ず。人間の道を守ると云ふことにも非ずして。唯た金儲け。長命等と。人の喰ひ付き易きことのみで。其金儲け長命等の目的を達する方法に至りては云何様にしても少しもかまはぬ。病氣を治すに鼠糞でもよし。梅干の黒焼にてもよしと云ふ様な始末である。此教へが十年二十年ならぬ内に如此信徒の澤山になるは。全く人情の正しき方よりも。變りた方に趣き易きに投た故であらう。商法にても少しづつ、利益を得て蓄財する正當の話は人が喜はず。一攫萬金と云ふ様な話になる。人が好んで之を聞く。つまり不養生して。遊んで居て。金儲け

して。長命すると云ふ。こぼれ幸を望む人情に投たのでありて。教の妙なるにあらず。正當の順序を踏む。因果の教はまごころしく思ふ人情より。佛教を信する人が其割合ひに少い。何卒互に惑はぬ様注意を願ふことである。

○善導大師証をこひ

定散二心をひるがへし

貪瞋二河の譬をとき

弘願の信心守護せしむ

善導大師証をこひとは。善導大師觀經の疏を作りたまふにあたり佛の密意弘深にして。たやすく之が解釋をなすべきにあらず。故に十方諸佛に證をこふて其しるを得たまひたるのである。其疏の中に二河の譬を説きたまふ御譬が一には定散二心をひるがへしと自力を戒め。二には弘願の信心守護せしむると。他力を知らしめたまふ。先其定散二心とは。定散の二機に付て。定心散心に分つなり之を二

心といふ。上の雜修や雜行をつとむる自力の心即ち定散諸機とある其機に各別の心をひるがへして。弘願の信心に向はしむといふことゝろなり。貪瞋二河の譬喩をとき等とは。この二河の御譬へは。散善義回向發願心釋の下に。出てある御譬にて。先初に今更に行者の爲に。一の譬喩を説て。信心を守護せんと仰せられて。譬へは人有て西に向ふて行んと欲するに。百千里ならんに。忽然として中路に二河あるを見る。一には是れ火河南に在り。二には水の河北に在り。二河各濶さ百步。各深ふして底なし。南にも北にも邊りなし。正く水火の中間に。一の白道あり。濶さ四五寸ばかりなるべし。此道東の岸より西の岸に至るまで。亦長さ百步其水の。波み浪みは交り過ぎて道を濕し。其火燄は亦來て道を燒く。水火相交て常にして休息ことなし。此人既に空曠の迥なる處に至るに。更に人なし。多く群

賊惡獸有てこの人の單獨なるを見て。競來て此人を殺さんと欲す。死を怖れて直に走りて西に向ふに。忽ち此大河を見る。即ち自ら念ふやふ。此河南北に邊畔を見す。中間に一の白道を見る。極めて是狹小なり二の岸相去ること近しと雖も。何に由てか往くべき。今日定て死せんこと疑はず。正く到り廻らんと欲すれば。群賊惡獸慚々に來り逼る。正く南北に避け走らんと欲すれば。惡獸毒虫競來て我に向ふ。正く西に向ふて道を尋ねて去かんと欲すれば。復恐くば此水火の二河に墮せん。時に當て惶怖すること復言ふべからず。即自ら念ふやふ。今廻らば亦死せん住らば亦死せん。去かは亦死せむ一種として死を免がれず。我寧此道を尋ねんと。前に向ふて去かん既に此道あり。必ず應に度るべしと此念を作す時。東の岸に忽ち人の勸むる聲を聞く。仁者但決定して此道を尋て行け。必ず死の難な

けん。若住らば即死せんと。又西の岸の上の人有りて喚て言く。汝ち一心正念にして直ちに來れ。我れ能く汝を護らん衆へて水火の難に墮せんことを畏れされと。此人既に此に遣り彼に喚ふを聞て。即ち自ら正しく身心に當て決定して道を尋て直に進て疑怯退心を生せず或は行こと一分二分するに。東の岸の群賊等喚て言く。仁者廻り來れ。此道險惡過ことを得と必ず死せんこと疑はず。我等衆て惡心ありて相向ことなると。此の人喚聲を聞と雖も。亦た顧りみず。一心に直に進で道を念ふて行けば。須臾に即西に到て。永く諸難を離て善友相見て慶樂すること已むことなきがごとしとありて。行者の用心をくはしく喩へ玉ひたのである。この御譬に。東の岸に人の聲ありて勸むるとは。釋迦如來のことにて。釋迦如來は。既に御入滅あそばして。たゞ教法のみあるゆへに。相たなくして。人の勸る聲

ありとのたまふ西の岸上に人有りとは。即西方極樂の阿彌陀如來なり。是は現在淨土に在して今現在說法と衆生を迎へたまふゆへに。人有て喚言くと。仰せらるゝのである。水火の二河とは。即ち我々の貪瞋の煩惱のことなり。白道とは。一往は貪瞋の惡を黒と善のことを白といふ貪瞋強き由が故に。即水火の如くと喩ふ。善心微なるが故に。白道の如くと喩ふとありて東岸西岸の間をへたて出離生死の邪魔になる。貪欲瞋恚は強盛なるゆへ水火に喩へ。善根はまことに微弱なるゆへに。白道四五寸と仰せらるゝ。その方ら微弱なるゆへ。行ふと思ふても行くこと能はずたとへば職業に不勉強のものゝ如し。勉強するものは。云何なる艱難も堪へ忍んで仕遂けるなれども不勉強のものは雨が降るといふては休み。頭痛がするといふては捨て置き。種々障に邪魔せられて。終に事を仕遂けることを得せ

ぬ如く貪慾瞋恚の邪魔強きゆへ。微弱なる善心にては。行くこと能はず。此ありさまを見ては。未だ他力のいわれがさこぬからたゞあやふみ恐るゝばかりである。爾るに東岸よりは其道を尋ねてゆけと教へ。西岸上よりは直に來れと呼びたまふ。此時は白道と御たとへなされたは。即ち本願一實の大道と申して。阿彌陀如來の本願のことである。そこで釋迦如來の往けよの發遣と阿彌陀如來の招喚の勅命に依て疑懼の念をはなれて決定の信心を生ずることを衆生貪瞋煩惱の中に能く清淨願往生の心を生ずとありて即衆生心中に白道が出来るなり。此時は白道は信心のことになる。此白道を一度びは衆生の信心に喩へ。一度は彌陀の本願に喩へたまふとありて。一つのものを。二つに喩へたまふは。他力の信心は本と彌陀の本願より起りて。更に衆生の機の方を當てにせず。佛の本願の儘を信する

信心なるゆへに。法の方と機の受け手前との。左右はあれども。機法一體にして二つなきことを示したまふ。こゝに於て定散二心をひるかへし。弘願の信心守護せしむるの御力があらはれることである。定散二善と云は自力の心よりつとむる善根にして。我が心を凝して觀察し。我が脩した善根を當にして。後生を求ること故に。貪瞋痴の三毒に邪魔せられて。成就することが出来ぬ。又群賊等喚ひ廻すと云て。種々の妄説を作して。そんなことで。極樂へ參らるゝものか此惡人が佛けになるといふやふな事は。決してない事である。若自力の信心自分く意見を立てし。往生極樂の道をさまたぐる。若自力の信心であるときは。我手許を當にする信心ゆへに夫れに障へられて。疑を起す。是定散の心なり。他力の信心は我が手許を當にせず。二尊の勅命に信順して。水火の二河を顧りみず。念々に遺るゝことな

く彼願力の道に乗ずと。更に餘の方へこゝろを振らず。唯た願力を當にするゆへに。自の善惡を顧りみぬ。御文章に。我身の罪のふかきことをばうちすて。彌陀に任せまひらせてと。のたまふこゝろなり。喩へば氣車に乗る時は。足の達者。不達者を顧みぬ。何程達者でも足の爲に早く行くにあらず。不達者なればとてそれが爲に遅るゝにあらず。自分の足で路を歩行は。必ず足の達者不達者による定散諸善は自分に路を歩行く如く。今他力の信心は氣車に乗ら如くである。今は定散の自力をすて。弘願他力にすかることを。教へさせらるゝゆへ弘願の信心守護せしむとのたまふ。然るにこの我身を當にせぬ。善惡を簡はぬといふを。惡く取ると大な間違が出来てくる。善根は入らぬのぢや。惡きものが御目當ぢやと云て。邪見になりて眞宗の俗諦門の教へに背き。世間の道に外るゝやふになる。

安心門と。行儀門を取違へぬやふ。能々聽聞して。安心門他力の信心を頂く時は。佛の方より不可稱不可説の功德を御回向に預かり更に自力の善根を持運ぶにあらざるゆへ。機の方は善惡を簡はず。唯た勅命に信順するばかりなり。信後相續の心得は。已に佛の願力にまかせ奉ら上はおのが心にまかせずしてたぐなめとあれば。我身はわろき徒者なりと。慚ち慎み佛の御慈悲よりおのづから惡きことを思ひすて。よき事に思ひつかせていたゞき。人道を美しく相守り。眞俗二諦の御教へに背かぬやふ。世をすこさねばなりませぬ。

○御文章によりて (御正忌中總會所に於て)

問曰信心決定するすがた。すなはち平生業成と。不來迎と乃至。下至一念と云ふは。信心決定のすがたなり。上盡一形は。佛恩報盡の。念佛なりときこゑたり。これを以て。よく心得らるべ

「き者なり」(讚題)

一七ヶ日の報恩講も。最早や今日が御満坐と相成りました。當年は寒中とは云ひ乍ら。余程暖き故か。參集の人々も。余程夥しい。此多くの人の群集するを見て。御繁昌と世間の人は云ふか。何故に元來斯く多くの人が群集するか。其源因を一つ考へねばならぬ。此れ全く開山聖人の御恩を。報謝せんと思ひて。群集したる者なれども能く／＼考ふれば。其心柱となる者は。阿彌陀如來の慈悲を。高祖が御傳へ被下た。其慈悲に引かざる者である。是れに付ても如來の御慈悲の大なることが顯はるゝなり。彌陀の光明は。盡十方無導光なるが故に。十方を此光明を以て。照し障導する所なし。此光明が即ち如來の御慈悲である。彼の磁石なる者は。方角を定る者にして。舟乗が。最も大切にする者である。海上に霧等が深く閉ぢたる

時は。此磁石で。何れが北であるか。南であるかと云ふことを知るなり。此れ磁石は。元來北の一方にのみ。向ふ者であると云ふことが。分て居るからである。斯く尊き者であるから。昔は慈石と云ひ居りしも。近來に至りて。磁石と書く様になりたと云ふ事であるが磁石と鐵とは。親子相慕が如き者である。例へば小兒を連れて親が雜沓の中を行く時に。小兒を見失ふ時。小兒は只親のみを尋ね。又親は小兒のみを思ふ。互に思ひ思はれて。他人の方には針は決して向かはぬ。小兒の思ひは常に親の方に向ひ。親は只管小兒を尋ね。水火の難をも恐れぬと云ふは。全く親の慈悲である。恰度磁石が相引くと同トことである。今阿彌陀如來の慈悲が。普く十方の衆生に及ぶことは。親の慈悲が子に向ふが如し。吾れ人は。差別の見を持つ故に。他人の子とか。自身の子とか云ふて。相隔つるけれども。

彌陀の御慈悲は。一切衆生を。彼れの此れのと差別なく及びて。恰も親が一子を思ふが如くである。其慈悲の至らざる所なき故に。盡十方無尋光とは申すなり。

此の難有廣大なる。彌陀の御慈悲を知らば。必ず彌陀如來の御膝下に。引寄せらるゝに違ひなれども。今日迄其御慈悲を知らざりしが故に。生れつ死につ。三界六道に迷ふたのである。然るを其の遁け回たる衆生を種々なる善巧方便を以て。六百年前に。開山聖人は敬禮大慈阿彌陀佛云々との玉ひで。此大慈悲を衆生に勧め玉へり。仍て吾々が此れを知り。即ち此に始めて。親を親と知りて。今日の如く十方より多くの人が參集するなり。されば彌陀の慈悲は。今日參集の人々の中心にして。高祖は此れが媒介とならせられたる者なり。此れが彌陀の慈悲の顯れた所である。

然るに爰に。一種の人がありて。人も參るから。我も參らんとて。參る人は。形は善けれども。心は役に立たぬ。似ねらるゝ人はよけれども。似ねる人は惡む。されば此れを御文章には。人みな名聞と屢御戒めなされてある。此の如き者は。決して聖人の御心に叶はぬことである。此様な人が集りたる時表面上より見れば。非常に盛なるが如くなれども。眞實なる繁昌と云ふ者ではない。一宗の繁昌は一人にても。信を得る人が多ければ。此れが繁昌である。徒らに名聞利養に走る人が。多く集たとて。繁昌と云ふ者ではない。信を得る人が多ければ。多き程。眞實の繁昌である。斯くありてこそ。始めて眞の報恩謝徳の。御佛事となることである。これこそ眞の繁昌と申す者である。

斯く眞に高祖の恩か知られて。參詣せらるれば。眞の同行なれども

唯人并に參詣する人があるならば。其人達の不品行等よりして。種々の惡評を。世間から受くる様になるか故に。眞宗御繁昌の碍けともなる可ければ。斯くの如き人は。今日此席に於て。各々の心中に改悔懺悔の心を起して。報謝せねばならぬ。

高祖の御恩は。何時も變りはなれども。御維新の節は。廢佛毀釋の論ありしが爲。此有様にて行かば。如何に變せんかと。人々大に心を煩し。心ある同行は。人にかくれて潜に參詣する様な事であつた故に。本山に參詣の人々も。今日の如く夥きことはなかりしも。其節參詣の人々は。眞の信者であつた。然るに今日は物變り星移りて。皇國も。立憲の政體となり。國會も開設せらるゝ様な美しき。社會となりたれば。維新の時の如き。廢佛毀釋の論もなく。自由自在に何處なりとも。我思ふ所に行くことの出來れば。御本山參詣の

人々も。維新時分とは。大に夥くなつた。斯く參詣が容易くなりたる故に。叅集の人々の中には。或は眞の同行にあらざる者もある可し。若し斯様な人あらば。他宗より終には邪見等と云ふ非難を受くる様になるなり。凡そ眞俗二諦に付き。俗諦門を捨つる人は。世間より眞宗の信者は。世の中の妨害物なり等と。批評せらるゝに至る。故に眞の信者なれば。眞諦門と共に俗諦門をも能く守り。人偏五常の道を踏み誤らざる様注意せねばならぬ。出家發心が必要ならば或は俗諦門を捨つることあるかも知らざれども。當流は此れに異なるなり唯商賈をし。奉公をもち。獵漁りをせよと。仰せらるれば。渡世家業をなすつゝ喜び。此の世に在る間は。陛下の御敕語の通りを守らねばならぬ。

尙一層烈しき邪見と云ふは。今の御讚題の意では即信心決定しての

のちには。自身の往生極樂のためとこゝろにて。念佛申し候ふ可きか。また佛恩報謝のためとこゝろすべきや。いまたそのこゝろをわすさふらふ」と。抑御當流は一念の立どころに凡夫直入の信心を治定するなり。五年も十年もかゝりて。得る者に非ず。高祖は二十餘年間。叡山に在て。御修行あらせられたれども。未來の一大事は。治定せられざりき。然るに一旦源空聖人の勸めによりて。立どころに。往生の業因を満足し玉へり。故に本願圓頓一乗の法と云り。斯く往生治定して。後ちの稱名に付きて。今問答し玉へるなり。今日の人々ならば。先づ信心決定してののちは。稱名はす可きや。否やと問ふ所なれども。今は稱名は稱へざる可らざる者として。問答し玉ひしなり。此の信後の稱名をなすことを。心得違ると大なる邪見となる。若し報謝の稱名なければ一念義と云ふ非難を受くるに至る

故に。稱へざる可らず。然れども其稱ふる心得は肝要なり。されば次にこの不審また肝要とこそおぼはさふらへとは仰せられたり。往生淨土の業因は。唯信心計りにてよし。信後は稱名するも。せざるも。勝手なり等と云へば。終には相續の形は失せて邪見となる。さればとて又其稱名を唱へて。一聲々々力を入れて唱ふる時は。自力となる。そこで稱名を調べて肝要なりと仰せられたるのである。故に信後は佛恩報謝として。一念よりは十念。十念よりは百念。念佛申す可き者なり。一念已後の稱名は。決して往生の業と思ふ可らず。彼の往生之業念佛爲本との玉ひと念佛は即南無阿彌陀佛なり。南無阿彌陀佛は。即往生の體なり。其の南無阿彌陀佛の由れを知りて。心に戴かれたるは。即信心なり。故に稱可き稱名は稱へて。往生の業とは思はず。報謝と思ひて。唱ふべし。されば南無阿彌陀佛

と稱ふるは。即ち嘆佛なりとの玉へり。然るに高祖は法然聖人に反
 對して。信心爲本とし玉へり。同ト法門なれども。法然聖人は。念
 佛爲本との玉ひ。高祖は信心爲本との玉ふ。其差あるは如何なる理
 由なるかと云ふに。先づ譬喩を以て解り易く談せば。藥ありとても
 飲まざれば病氣は愈はず。今も其通りにて法體の藥ありとても。一
 念の立ところに飲まざれば。往生は契ふ可らず。法然上人が。念佛
 爲本との玉ひとは。佛の手元に在る。法體を指しての玉ひと者にし
 て。高祖が信心爲本との玉ひとは。佛の手元に在りし。法體のいわ
 れを。聞き開きたる所を指して。仰せられたる者である。故に法然
 聖人と。高祖と。言葉は變はれども。其實は同トことである。故に
 一念已後の稱名は。藥の効能なれば。稱名禮拜するも。自分の行に
 あらず。自然と多念に及ぶ道理なり「忍ぶれと。色に出にけり我戀

は。物や思ふと人の問ふ迄」。言ふまいと思へど今日の暑さ哉」。信
 心決定の上には。知らず識らず。報謝の稱念は一念より多念に及ぶ
 者である。善導は。上盡一形下至一念との玉ひければ報謝の稱名に
 は。限りなし。一念せずとも往生には違ひなければ。信後命延れ
 は自然と多念に及ぶ道理なり。故に高祖は念佛共々往生あらせられ
 た。念々稱名常懺悔なれば。稱名する人は。腹が立つも。慾が起る
 も。之を稱へて喜ぶ譯である。斯くなりてこそ。眞の繁昌であるか
 へすくも心得間違のなき様。法儀相續が第一である。

○眞心徹到するひとは 命剛心なりければ
 三品の懺悔するひと、ひととと宗師はのたまへり
 此御和讃は。善導大師の御教化にして。正くは禮讚の中にある文に
 依つて。御述なされたのである。此一首の終りに宗師はの玉へりと

ありて。宗師とは淨土一宗相承の祖師と云ふことであるが。今は正しく善導大師を指して宗師とのたまふことである。處で其宗師が如何なる事をのたまふぞと云ふに。真心徹到するひとは。三品の懺悔するひと。ひとしひぞよと仰せられる。真心徹到とは。何の様なことであるかと云ふと。真心とはまごころである。其まごころが徹到と。そのそこまで到りとくこと。すなはち阿彌陀如来様の御まことのこと。其御まことをいたぐいた。すなはち信心の得られた人といふこと。そこでこの真心の徹到といたりといたりた人なれば。三品の懺悔をする。極上等の方々とひとしひぞよとの玉ふことである。さて懺悔とは自ら罪を悔む事。世間の上でも何ぞ悪事をしたことがありて。それを打出して話しするを懺悔はなしと云ふ。もとより懺悔すると云ふは。自分の今迄造りし罪とがを悔ひあやまるこ

とであるが。其罪をあやまることになる。くやむと云ふことが出て来る。これが懺悔の悔の字である。先づ文字上からお話をすれば懺とは梵語でありて。具さに云へば懺摩と云ふ。支那語に譯せば。悔過と云ふ事である。處でこの懺悔といふ言葉は天竺の音と譯語とを合せてひとつの言葉としたのでありて。例へば「イングラント」の首字英。或は「フランス」の佛に。其儘國と云ふ文字を付けて。英國佛國と云ふ様なものである。次に三品とは。懺悔をするについて。上中下の三品がある。先づ上品の懺悔とは。遍身血の汗を流し。眼中よりは血の涙を流して。自ら罪を悔ゆるに最も甚しき故に上品とする。中品とは遍身に熱き汗を出し。眼中より血の流るゝを云ふ。下品とは遍身より汗を流し。目より涙の出るを云ふ。これが三品の分類である處で懺悔をするに其様に血の汗や血の涙の出るものであ

るかと思ふ人もあるかも知れぬが。世間の上でも。衆人中で非常に
 耻しいことがあると云ふ時には。總身に冷汗が出ると云ふ。又非常
 に悲しいことのある時は。血の涙が出ると云ふ。そこでいよく我
 が身は浅間らしい者であると聞て見ればあら浅ましくやと自ら罪を悔
 其自ら罪を悔るに就て其根機に上中下の差別ある故に。懺悔にも亦
 此の如く三品の次第を生ずるものである。併し今時の吾々はこの三品
 の下品にも兎てもく及ぬ。下々の下の根機であるから。極悪深重
 と聞いて見ても。左程驚も立たず。又しみぐと懺悔をして見たい
 ものトやと思ふても。なかく汗も出ぬは涙も出ぬ。まことに浅間
 しい根性である。然るに他力の信心決定の行者は。よとや體より血
 は流さずとも。汗は出でずとも。真心徹到と。如來の御まごころが
 至り届て下さるゝ故に別に懺悔をするのでは無けれども。信心の徳

で三品の懺悔するひと、同トことにならる御いわれがあるぞよと。仰
 せらる。さて又真心徹到とは同トく善導さまの序分義と云御聖教に
 は。真心徹到して苦の娑婆を厭ひ。樂の無爲を願ひ。永く常樂に皈
 すべきと仰せられてこれは韋提希夫人がこの娑婆世界を厭ふに付い
 て。釋迦如來が夫人を相手にして御經を御説なされた。韋提希夫人
 が其起源は自分の生みの子の爲に。牢屋の中に幽閉せられ。淺まら
 さま。苦境に沈みし時。夫人は世尊に向ひたてまつりて。願くは我未
 來は。惡聲を聞ず。惡人を見ぬ。身の上になりたいたいことである。又
 私は如何なる罪業ありて此の苦を受くるのでありまするか。まこと
 に罪業の程か淺ましく悲しひと。五體を地に投けて我が罪業の懺悔
 をなす。どうぞ助けて下されいと御願ひ申し。眞實に心の底から。
 娑婆を厭ひ。浮土を願ふた。其處を真心徹到して云々と仰せられた

これが言葉の根據である。次に金剛の信とあるは。金剛の眞心を發すにあらざるよりんば。永く生死の元を絶やとも仰せられて。金剛とは。水の中にも汚されず。火の中に入りても焼けず。破壊せぬものでありて。金剛心と云ふは。不變不易に名けたもので。もどく吾人の境界は不圖心に逆ふ處から。娑婆を厭ふ様にもなり。今生はこれぎり實に娑婆は厭ふべきところであるとも思ひ。其時は立派に厭ふ様なれども。木蔭を通る時には熱さ忘るゝと云様なもので。淨土へ参りたいと心懸けたは善けれども。たうやらすると心か變り。熱心に御法義を聽聞して居るかと思ふと。又ぞろ世間の事に貪着して。其熱心も何時にか冷めて本のすかたになりて仕舞ふ。是れが金剛心でなき故。厭ふと云ふも一時。忻ふと云ふも暫くである。然るに今は眞心徹到とて。ごこく迄も未來佛になると云ころが。眞

心徹到とつき通るから。これを金剛信と云。金剛信であるから。眞心徹到と何處々々までも到とゞく。故にこれを三品の懺悔するひと同トいとも仰せられることでありて。何故三品懺悔するひと等しきぞと云ふなれば。これは佛智他力の金剛不壞の眞心でありて。御和讃に。名號不思議の海水は。逆謗の屍骸もとゞまらず。衆惡の萬川歸らぬれば。功德のふらほに一味なりとある如く。佛心をいたゞきて我が罪も障も皆轉じて仕舞ふからのことである。而して其金剛心とは。如何して得らるゝかと云へは。凡夫の思ふたことは。忽ち變る故。凡夫の自分の心を固めてするではなひ。佛の間違ないこと云ふ事を受取りたでなければ。金剛心とは云へぬ故に。次下の和讃には。金剛堅固の信心のさたまるときをまちわてぞ。彌陀の心光照護して。永く生死をへたてけるとありて。佛の方より治定と御さす

けにあづかることである。左すれば今の真心徹到も我心ではない。佛の方より賜はるのである。自分の思ふたことは。何時迄も貫徹することには出来ぬもので。世間の中でも自分にきめた事は變り易い。けれども。人よりきめられたことは中々變らぬ。また自分より目上の人からきめられたことは。尙々かはらぬ。喩へば裁判所より明日何時に出頭せよと命せられたら。勝手に止めると云ふことは出来ぬ。同等の者なれば我儘も云へるけれども。我目上の人より云はれたことは。十に九つはかはらぬ。況んや今は最勝無上の佛の方より。未來の大事を御定めにあづかり。往生は一定と。佛の真心が徹到してあら有りがたやとおうけの出来たが即自身の真心となりたる處である。そこで信心と云ふ二字をは。信の心とよむ。まことの心と云ふは。わが心にては助からず。如來の善き御こゝろにてたすかるがゆ

ゑにまことのこゝろと名づくることである。佛の方より御定めになりたものであるから。變ることが出来ぬちやうど裁判所の最上等の大番院で。判決を受けられた様なものでも最早動かすことが出来ぬ。そこで其自力を棄て、他力に乗托するといふことに付いては。他力におまかせ申すとの事ぢやけな。まあ、他力に任かせてみやうかと云ふ位なことではなかく、眞實に任せられるものではないが。佛法のおいはれ。本願の由來を聞かして貰ふて見れば。阿彌陀如來を御たのみ申すより外に助かる縁のない。煩惱具足の惡凡夫。無有出離之縁のいたづらものと。始めて我機の方のあさましきことが知られる故に。かゝるもの迄も助け玉ふは阿彌陀如來ばかりなれば。この阿彌陀如來をたのみ奉るより外はないと知られる。こゝが自力のすたりて他力に御まかせ申す處である。世間のことでも醫者に療治を頼

みながらも醫者の云ふ通り守られぬといふはまたく信仰が足らぬからのこととてありて。本とうにいよく病氣も重いと知られ。あの醫師をはなれては。病の治ることも六かしい。彼の醫者てなければならぬと知られてこそ始めて一心一向となりて醫者の云ふことも守られ養生も出来る様になることであるが。今もその如く自力の修行で行けぬは云ふ迄もなく。諸佛を御たのみ申してみても今の時分は末代惡世なれば。諸佛の願力ではなかくかなはざる時なり。諸佛の力もかなはぬこと故。阿彌陀如來の若不生者の御力の外に助かる便りは二つも三つもあるべからずといふことが知られるから。斯る機を助け玉ふ阿彌陀如來のまじまさはこそと。後生の一大事をばすつかりと阿彌陀如來におまかせする様になることである。そこでまたこの心が信後にまで相續するから。我身は惡ひと懺悔して。何事

もたしなむと云ふことが出来る様になり。念々稱名常懺悔と。我身をあやまりはちて日暮をする様になるから。其日常の行状も自然とうつくしくなる。すなはち彼の三品の懺悔する上根の人々と其徳を同うする様になることである。

○眞實信心のざるをば 一心かけぬとをしへたり
 一心かけたるひとはみな 三信具せずとをよふべし

此御和讃は。善導大師の御釋。往生禮讚の前序に依て御讚述なされたものなり。すなはち禮讚前序に觀經の三心を御釋なされてある。それを和けさせられたものである。其三心とは。第一が至誠心。これは往生するにはまことでなければならぬと云ふこと。第二が深心。深心とは淺心とて淺きに對して。深き心でなければならぬと云ふこと。其深いとは何が深いぞと云へば。深く信するの心とありて。深く機

を信ト深く法を信する二種深信ちやとの給ふ。第三が回向發願心とて善をふり向てむかふて。往生を願ふと云ふことこれがまづ言の上の咄である。如此云ふと。三心別々に發して。三心ながら具足せぬは。往生が出来ぬやふに見へる。觀經には具三心者必生彼國とありて。此三心を具足するものでなければ往生はならぬと説給ひ。又善導はこれを裏から御示なされて。若少一心即不得生と仰せられた。三心の中されが一つ缺けても。往生はならぬとの御教化であるこの時は隨一の一と云て三心の中の一分にて。それがかけても往生は出来ぬと云ふことなり。ところが今は眞實信心のざるをば一心かけぬとをしへたりと。高祖大師は仰せらるゝ。一心とは深心のこと深心の一が缺たら往生が出来ぬ。一心の缺けたひとはみな三心とも缺けるぞ。一心を得た人は即ち三心具足のひとであるとの御言なり。

り。一心とは深心のことと云ことは。禮讚に深心を釋して乃至一念無有疑心と示し給ふ。然れば三心別々に發すにあらず。本願を信する無疑の一心のところ自ら至誠心も回向發願心をも具するがゆへに。一心を得れば三心具足すとの御教示である。何故に無疑の一心に三心を具するぞなれば。至誠心と云も衆生のもことにあらず。本と佛の至誠の御まことなり。それを衆生が信する時。阿彌陀如來の御まことを。まことと信する時。衆生のもこととなるこれが至誠心なり。又回向發願と云も佛のものなり。衆生の方には回向とやうにも更に一善もなし。發願するにも願を起すべき力がない。そこで阿彌陀如來が發願修行して。衆生に回向と御與へ下さるゝを。信する一念に貫ひ受けて衆生の發願回向となるこれを御文章には凡夫の方よりなさぬ回向なるがゆへにこれをもて。如來の回向をは行者の

かたよりは不^ふ回^ま向^{かう}とは申^{まう}すなり (三^{さん}帖^{てう}目^め第^{だい}八^{はち}通^{つう}) と御^{おん}示^しなされてある。如此^{かくこのごとく}一^{いつ}々^つ分^{ぶん}拆^ちしてみると。一^{いつ}々^つがみな佛^{ぶつ}より回^ま向^{かう}のものがある。してみると。我^{われ}等^らが手^て許^きには何^{なに}が残^{のこ}るぞと云^いへば唯^{ただ}た信^{しん}ずる心^{こころ}計^{けい}りである。唯^{ただ}一^{いつ}心^{しん}さへあれば餘^{あま}は自^{おの}ら具^ぐ足^{そく}す。そこで一^{いつ}心^{しん}かけたるひとはみな三^{さん}信^{しん}具^ぐせずとおもふべしとの給^{たま}ふ。さて一^{いつ}心^{しん}と云^いは何^{なに}れにても一^{いつ}心^{しん}と云^いべきに。何^{なに}故^{ゆゑ}に真^ま中^{ちゆう}の一^{いつ}つをさして一^{いつ}心^{しん}と云^いやと云^いに。一^{いつ}心^{しん}とは二^に心^{しん}なきこと。その二^に心^{しん}ないとは即^{すなは}ち疑^ぎ心^{しん}のなきことなり。そこで一^{いつ}心^{しん}と云^いふは真^ま中^{ちゆう}の深^{じん}心^{しん}のことになる。深^{じん}心^{しん}は深^{ふか}く信^{しん}ずるの心^{こころ}とありて。疑^{うたが}ひなきことなり。疑^{うたが}ひと云^いは心^{こころ}の二^に相^{さう}に轉^{てん}ずること。往^う生^{じやう}出^で來^きやうか出^で來^きまいか。間^ま違^{ちが}ひあるまいか。間^ま違^{ちが}あらうかと。心^{こころ}が兩^{りゆう}方^{ほう}に轉^{てん}トて決^{けつ}定^{てい}せぬことなり。そこで無^む疑^ぎの信^{しん}心^{しん}のを一心^{しん}と御^{おん}示^しなされるのである。

さて爰^{こゝ}に篤^{とく}とはらのすゑ處^{ところ}を定^まめて。聽^か聞^きせぬはならぬ。至^し誠^{じやう}心^{しん}とはまことなり。回^ま向^{かう}發^{はつ}願^{がん}とはこちらからねがふてゆく。これを我^{われ}々^らの方^{ほう}からすることであるならば。到^{たう}底^{てい}出^で來^きぬこと。衆^{しゆ}生^{じやう}のまことはとても佛^{ぶつ}果^{くわ}に至^{いた}るまで仕^しとゆることはならぬ。今^{いま}は佛^{ぶつ}のまことを頂^{いた}くによりて。易^{やす}々と仕^し遂^{すい}けるなり。喩^{たと}へば我^{わが}が足^{あし}で歩^{ある}くときは。一^{いつ}日^{じつ}に百^{ひやく}里^りの道^{みち}を歩^{ある}くことは。とても出^で來^きることでない。然^{しか}るに氣^き車^{しや}に乗^のるときは。何^{なん}の造^{ぞう}作^{さく}もなく一^{いつ}日^{じつ}に百^{ひやく}里^りの道^{みち}を行^いく。是^{こゝ}れ氣^き車^{しや}の力^{ちから}が。乗^のるもの、力^{ちから}となるのである。氣^き車^{しや}の人^{ひと}を乗^のせて行^いたひと云^い願^{がん}と行く力^{ちから}が乗^のる者^{もの}の行^いたひと云^い願^{がん}になるなり。乗^のる者^{もの}は行^いたひと云^い願^{がん}がありても。その願^{がん}が叶^かはぬなり。それを氣^き車^{しや}に乗^のりさへすれば。氣^き車^{しや}の願^{がん}行^いが乗^のるもの、願^{がん}行^いとなる。今^{いま}眞^ま實^{じつ}信^{しん}心^{しん}を得^える時^{とき}。佛^{ぶつ}の至^し誠^{じやう}心^{しん}回^ま向^{かう}發^{はつ}願^{がん}心^{しん}のありたけが衆^{しゆ}生^{じやう}のものとなり。往^う生^{じやう}の因^{いん}果^{くわ}

を満足するは。佛の衆生を助けたいの願行が衆生の願行となりて下
 さる。氣車は唯だ。乗込計りで行たひと思ふ處へ行く。今も乗彼願
 力と信する計りで願行を満足す。これ能乗所乘一致になる處なり。
 然れば信する處にて。ことが成すると云へば。信するは衆生の力ら
 かと云へば。其信力と云も別に衆生の方にあるにあらず。皆佛力な
 り。蓮如様は。信する心も念ずる心もみな。彌陀如來の方より發さ
 るるものなりとの給ふ。そこで機法二種の深信と云へば。信心の
 相が二つあるやうなれども。機の深信は我が機ではゆけぬと信する
 こと。法の深信とは阿彌陀如來の御助けに依り往生すると信するこ
 となれば。更に我が力らはなきことである。
 利他の信樂うるひとは。願に相應するゆへに。教と佛語にたがへ
 ば。外の雜縁さらになし。

此讚已下三首は。往生禮讚に專修雜修の得失と云ふことを示し給ふ。
 それを和け給ふ御和讚である。その中。初二首は專修の得を示し給
 ふ。專修とは専らに修するとして心を專一にして修すること。我が心
 に任すときは。種々の心が發る。所謂散亂麤動の心なるゆへに。そ
 の心に任すときは。とても專修にはならぬ。佛の專に隨ふ故に專修
 になるなり。喩へば我身が歩く時は。横見したり油斷したり種々の
 事がありて道を行くに妨げがある。氣車に乗る時は。氣車が専らに
 油斷なく行ゆへに。乗て居るものは横見して居ても。人と咄して居
 ても。眠りて居ても。氣車は差支なく専らに行く如く。若自力で企
 るときは。本願相應せざるゆへ。雜縁きたりみたるなりと種々の邪
 魔がありて專修にならぬ。今は佛願他力の氣車の徳にて。如何なる
 ことも邪魔にならず專修となる。氣車に乗るときも横見もする話し

もする種々の事はあれども。それに障へられざるは氣車の徳なり。他力の行者も心は散動して種々の心は發れども他力信心は更にそれに障へられざるのである。

利他の信樂とは利他とは他力のかへ名にして。他を利益すると云ふこと。これは如來さまより云ふことばにして他とは衆生をさす。阿彌陀如來が他の衆生を利すると云ふこと。そこで觀經讚には如來利他の信心との給ふ。然るに如來の衆生を利し給ふ利他大悲を領受して往生を決定した信心ゆへに。衆生も亦二利圓滿して他の衆生を濟度利生するが此利他の信樂である。これすなはち佛の願が衆生の願となり。佛のまことが衆生のまこととなるのである。信樂とは信は疑はぬこと樂はこのもしく思ふこと。これ疑のはれやうのことなり。たゞあれば白ひ。これは黒いと。疑はぬと云やうなことではなく。

我が往生に間違なく助ると疑ひ晴れて。このもしく思ふ疑のはれやうなり。そこで御當流の信心には樂の字か付くのである。さて他力の信心を得た人は。第一に願に相應するゆへにとある。願とは阿彌陀如來の本願にして。佛が専らなるゆへに。専らなり。佛が退轉せぬゆへに。退轉せぬやうになり。佛が顛倒せぬゆへに。衆生が顛倒せぬやうになる。第二に教に隨ふ。教とは釋迦如來の教へなり。正信偈には如來所以興出世唯說彌陀本願海五濁惡時群生海應信如來如實言とある。釋迦如來の彌陀の本願を御勧め下さるか。如實の御言ゆへ。彌陀の本願に相應したるが即ち釋迦の教に隨ふなり。彌陀釋迦の御言が二つでありたならば。一つのものでは兩方に相應するところが出來ぬ。丁度昔の孝行人が。母親は草履はいて行けと云ふ。父親は下黙をはいてゆけと云ふ。どちらの言はにも背かれずして。

片足には草履をはき片足には下駄をはいて行たと云ふ。今も彌陀釋迦の御言が違ふならば。一心にはなられぬけれども。彌陀の招喚釋迦の發遣。たゞこひよゆけよにして一致なるゆへ。信心決定して疑ひなき心が本願に相應じ。佛教に隨ふなり。第三に佛語に隨ふ。佛語とはこれは諸佛の御語。これ阿彌陀經に恒沙の諸佛が言はをそへて。證誠護念と給ふ。釋迦彌陀二尊の語はに隨ふが即ち十方諸佛の語に隨ふなり我が心に從ふときは雜縁が來り雜る。今は佛力に隨ふて往生一定と決定するゆへに。雜縁の爲に亂動せられず。そこで御文章にはあきなきひをもち。奉公をもせよ。獵すなとりをもせよ等の給ふ。いかなることにも妨げられず。動亂破壊せられぬ。何故なれば三佛の語にたがふがゆへに。自力の修行は我が手許より仕立て、行くことゆへ。雜縁が邪魔になる。喩へば我身が道を歩くと

きは。種々の事柄が皆な邪魔となりて道が進まぬ。氣車に乗れば何をして居ても邪魔にならず。又外より何が出て來ても害をなさず進み行くは。氣車の力らに依るゆへなり。利他の信樂をばて佛願に相應じ。佛教にたがひ。佛語に隨順するゆへに。外の雜縁の來て妨ることなきが專修の得であるぞとの御教化である。

○御和讚によりて

十方微塵世界の乃ひとしくひとへにすゝめとむ」今日は針水和尚の一周忌にて。先尅讀誦に相成ました。阿彌陀經の御和讚を。讚題として御咄と致ませう。この阿彌陀經といふは南無阿彌陀佛の名號一つで。凡夫が往生の出來る御由を御説なされた御經である。其我等凡夫を御助け下さるゝはいかなる佛けぞと云に付て。先づ初に極樂の依報とて極樂國土の莊嚴を説玉ひ。次に正報とて阿彌陀如來の

御徳を御説きなさるゝに付て。光明無量壽命無量のゆゑに阿彌陀と名くと。阿彌陀といふ御由れを説せられてある。其ことを初の讚に十方微塵世界の念佛の衆生をみそなはし。攝取してすてされば。阿彌陀となづけたてまつる」と御示なされた。まづ衆生を助け玉ふ光明に付て。阿彌陀如來の御徳を御讚述なされた。その光明といへば。ひかりちや。ひかりといへばものを照すものなり。阿彌陀さまのひかりは何をてらすぞランプのひかり。提燈のひかり。日輪のひかり。皆なそれく照すものがあるが。今阿彌陀如來の光明はそのやうなものを照すひかりでない。十方微塵世界の念佛衆生を照して攝取してすてぬとあるのちや。この念佛の衆生を攝取すとあるは。これは觀經と一組にして御釋なされたものである。觀經には光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と御説なされてある。光明無量にして十

方の國を照すは。たゞ照すばかりでなく。念佛の衆生を攝取してすてぬぞよと仰せらるゝ。その念佛とはたゞ口に稱へることではない心に南無とたのむことで。當流には彌陀をたのむが念佛なりとありて。南無とたのめばかならず阿彌陀佛の助け玉ふといふ道理を。念佛の衆生をみそなはし攝取して捨されば阿彌陀と名けたてまつるとの玉ふ。たのむものを攝取し玉ふ光明ゆゑに。たのむ一念が肝要なり。それなればたのむ機は衆生の力らかといへば。決して衆生の自力でない。たのむ機は目のこと。攝取のひかりは。日のことといふて。目でものを見るといへども。目の力ではみぬ。目のちからならば闇りにても見ぬさうなものなれども。夜の闇りには何も見ることが出来ぬ。さすれば日輪のちからによりて。物を明らかに見日輪さまを拜む。今も阿彌陀如來の攝取不捨の御まことが至りと

いて。たすけるぞよがいたりといふゆゑ。たすけたまへと信願する信心が發りたによりて。たのむころは目のものをみるごとく。助け玉ふ攝取のちからは日輪のひかりのことでくである。そこで御文章には。信ずるころも念ずるころもみな彌陀如來の御方よりおこさしむるものなりと仰せられた。然ればたのむものを必ず助けたまふと云ふは。みな御六字の御謂れにて。念佛の衆生といふは南無の二字。攝取してすてぬとあるが。すなはち阿彌陀佛四字の心ゆゑに。攝取してすてざれば阿彌陀となづけられたと仰られた。よりに南無阿彌陀佛の外はない。この御六字を佛の方に置かずと。衆生の方へ貫らはねばならぬ。そこでその謂れを次の御和讃に御示なされて。恒沙塵數の如來は乃すすゝめしむ」と仰せられた。雜行すて、彌陀をたのむと云ふは。萬行の少善といふ御六字の外の少々の

善根や功德には目をかけな。南無阿彌陀佛の六字のうち。凡夫往生の願行も大般涅槃の證の果も。彌陀と衆生と機法一體に御成就なされて。諸佛の悲願に超過して。不可思議の誓願。不思議の名號にて。いかなる極惡深重の衆生もたのめは必ず助かる謂れが。彌陀の本願ゆゑ。名號不思議の信心と名號と信心とを。ひとくみにして御すゝめなされるのである。この御由れは釋迦如來さまが自證知見としてあなたか自ら證據に立て。我れ是利を見るかゆゑに。此言を説どの玉ひ。それを六方恒沙の諸佛方か同く勸め同く讚め同く證誠護念なされるか阿彌陀經であるから。恒沙塵數の如來はひとしくひとへにすゝめしむと御示なされた。その諸佛の御教化を受ついで御教化下さるは有縁の大善知識ゆへ。大善知識の御化導によりて。南無阿彌陀佛の六の字のいはれを聞きひらきて信心歡喜の身みとなられたが。

名號不思議の信心をわられた身の上といふものである。この信決定の上は唯佛恩報謝の爲に稱名念佛懈怠なく相續して喜ばるゝが信心をわたる念佛の行者といふぞよとある云云。

○御文章によりて (播州同志會夏期講習に於て)

信心獲得すといふは。第十八の願をこゝろうるなり。この願をこゝろうるといふは。乃至。凡夫に廻向しましますこゝろなり(讚題)此度は。當國同志會の法中方夏期講習會に付て。罷越し。昨日より公衆に向て説教を致し居るところ。不圖も當村内にありて。これら病に罹りし人のありたる由。ついでには今日は斯く多人數群集すること。危険なる次第であるから。説教を中止するか宜しからうといふ話もありたる由。御尤もなることである。朝廷にありて。豫防の事を嚴く仰せ出さるゝは。一般人民をひとり子の如く思召。可愛

がりて下さるゝよりして。豫防の能く行届くやうと。慇に御注意を下さるゝことである。去年から斯やうに遠近より。多く集まられたる人々が。たゞ空しくを分れて歸りても。それで豫防になるといふ譯けでもないから。今日爰に集りた人々が。豫防の心得を聽聞せられたなら。却てそれが朝廷の思召に契ひ。今日參詣になりました所詮であらふと思ひます。依て今日は其豫防の心得の事を御話致します。中には私は説教を聽聞に参りたのに。これら病豫防のことは聞きたくないと思はるゝ人もあらふが。これ全く説教の外でとでない何せならば御當流の御教化は。眞俗二諦にして王法爲本の俗諦門を守るといふは。朝廷の仰せ出されを能く守ることである。衛生のこゝとを嚴く仰せ出さるゝも。衛生といへば各自の吾身を大切にすることである。爾るところが吾身を大切にすることは。左程いふて貰は

すとも。よく知て居りますと。いはるゝ人もあらふけれども。然
 い。喩へば親が子を可愛がる如くぞ。子供といへども。病が好きな
 怪我するが好きなといふものはない。然るに心に任せて好きな食
 のを食。種々の危険の道具を持遊ふと。終に病を引起したり。怪我
 をして返へらぬ。後悔をするに至る。そこぞ親は厳く教ふるのであ
 る。今も吾身大事と知りつゝ情に引れて。終に衛生の道を踏み外す
 ゆゑに。四千萬の人民を。獨子の如く思召て。衛生上のことを。嚴
 く御注意下さるのである。さて其衛生に付て一己の衛生と。公衆の
 衛生の二つがある。一己の衛生とは吾身一人上の事にて。すなはち
 上にいふ通り。吾身を大事にすることである。吾身を大事にせねば
 ならぬことは申すまでもなき事にて一人としてこれを爲すともよい
 といふ人はないか。別して佛法を聽聞する身は。彌よますく大事

にせねばならぬことである。何せといふに。三界六道の中に於て。
 佛法を聽聞出来る身は。この南浮の人身とて。吾々の境界より外に
 ない。天上に生れては。樂みに耽りて聞ことを得ず。三惡道に生れ
 ては苦みに迫りて聽聞が出来ず。人間でも須彌四洲の中。たゞこの
 南閻浮洲ばかり。佛の出世ありて佛法を聞かると。誠に難有この人
 身である。其佛法といふは心の病を治す法にて。其心が依所として
 居がこの體たである。この體がなきときは心が依て居る處がない。
 然れば若く未だ領解決してなき身は。いよく衛生を大切に
 存して居て早く他力の信心を領解し。彌よ吾身が信心を得て見れば
 この得がたき他力信心の御謂れを。親子兄弟夫婦。互に未領解のも
 のをすゝめて。親が得たれば子をすゝめ。夫が得たれば妻にすゝめ
 兄が得れば弟にすゝめて。もどくくに信心領解の身の上とならねば

ならぬ。實に大切なこの身である。まことによろこばしき人身にて無量永劫の大幸福を得ることゆゑに。先徳は生々にうけし生よりはこのたびの人身もつともよろこばしく」とおはせられてある。よりて一己の衛生を大切にす。人界受生の本分をつくさねばならぬことである。次に公衆の衛生とは。世界一般に對してのことなり。吾身さへよければ。人は構はぬといふは人間の道でない。吾身一己の衛生を守ると同時に他人の上を思はねばならぬ。喩へば我家は焼けても構はぬからと云て。家の焼けるを捨て置く時は。忽ち焼けて延びて。一村中の大火事となる。吾が身は家が焼けても。承知の上なら宜しいか知らぬさも。一村多人数は。思ひ寄らぬ難儀に及ぶ。我身ばかりを思ふて。人の上を思はぬと。大變なことが出來すやうになる。子供か火慰みして遊んで居て。若物に燃ら付きたる時。直に

人に告げて。打ち消さへすれば。大事に及ばずして済む而るを親に告げたら呵られると思ひ。押し隠して置きて。次第に燃ら揚りて。多人數寄りても打消すことのならぬ大火事となる。若し一人が病に罹りて。人にいへば嫌な藥を吞ねばならぬ。嫌な所へつれて行かれにやならぬといふて。包み隠して置く時は。吾身はそれで宜しいか知らぬが忽ち他人に傳染して。一村多人數の難儀となる。よりて吾身一己の衛生を守ると同時に。公衆の衛生に注意す。世間一般他人の事を心かけるが肝要である。殊に佛法を信するものは。吾か宗は王法爲本の宗義なれば。天皇陛下に於ては。億兆保安の思召より。國家の安寧秩序を相ひみたれざる限り。信教の自由を許すと。憲法を下し賜りし下に。佛法を信して居るからは。世界公衆の安寧を思ふころがなければならぬ。そこで高祖も。念佛まうすにも世の中